

# 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査  
(平成25年度)

附編1 消防庁舎建設設計画に伴う谷地遺跡発掘調査概報

附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)



谷地遺跡  
愛宕山遺跡  
堀の内遺跡  
湯坂山B遺跡

谷地遺跡出土 土偶（縄文時代）

2015年3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会



# 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査  
(平成 25 年度)

附編 1 消防庁舎建設計画に伴う谷地遺跡発掘調査概報  
附編 2 谷地遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

谷地遺跡  
愛宕山遺跡  
堀の内遺跡  
湯坂山B 遺跡

2015 年 3 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会





谷地遺跡 繩文土器（縄文時代中期前半）



谷地遺跡 石器（縄文時代中期前半）





谷地遺跡 土偶（縄文時代中期前半）



谷地遺跡 土製品・石製品（縄文時代中期前半）



## 序 文

蔵王連峰の東麓に抱かれた蔵王町には、蔵王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた山麓文化が息づいています。蔵王の山と、そこに暮らす人々が創り出した蔵王山麓の風景は、私たち町民の誇りであるとともに、将来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

蔵王町には約 200 か所の遺跡が発見されており、先人の生活文化を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などの文字資料だけでは知ることのできない地域の実情や、まだ文字がなかった時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありのままに教えてくれるものです。

一方で、町内各所の地中に埋もれている遺跡は、様々な開発による破壊の危機にさらされています。このため当教育委員会では、遺跡地図の公開などで遺跡の所在を周知するとともに、開発との関わりが生じた場合には宮城県教育委員会と連携して遺跡の保護に努めています。

本報告書には、平成 25 年度に各種開発事業計画と遺跡の関わりを確認するために実施した遺構確認調査と、小規模開発事業で遺構の破壊が避けられない場合に実施した緊急発掘調査の結果を収録しています。

また、平成 23・24 年度に実施した谷地遺跡発掘調査の概報を附編として収録しました。谷地遺跡では多量の遺構・遺物が発見され、縄文時代中期前半の拠点的な集落が営まれていたことが判明しました。重要な発見を広く知っていただきたく、本報告書の刊行に先がけて発掘調査成果の概要を公表するものです。

先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、活用を図りつつ未来へ継承していくことは、現代を生きる私たちに課せられた責務です。蔵王山麓の歴史や文化遺産は、蔵王町に息づく山麓文化の根底となるものであり、現代社会において求められている地域色豊かなまちづくりにとっても欠くことのできないものであります。本報告書にまとめられた学術的成果が広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、各種開発事業主の方々には、遺跡保護の重要性について深いご理解を賜り、事業計画との調整や遺跡調査の実施等にご協力いただきました。また、調査の実施と本報告書の作成に際して、多くの方々にご指導とご協力を賜りました。ここに心より深く感謝申し上げ、序といたします。

平成 27 年 3 月

蔵王町教育委員会  
教育長 佐藤 茂廣

# 例 言

1. 本書は、藏王町教育委員会が埋蔵文化財保護調整事務の一環として平成 25 年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書で報告するのは、下記の発掘調査の成果である。
  - 各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（塙の内遺跡・湯坂山B遺跡）
  - 小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（愛宕山遺跡）
3. 現在年次計画に基づいて整理作業を進めている谷地遺跡の発掘調査成果について、下記の 2 編の報文を収録した。
  - 附編 1：谷地遺跡発掘調査概報（平成 23・24 年度調査）
  - 附編 2：谷地遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）
- (1) 谷地遺跡の発掘調査成果については、発掘調査見学会（平成 24 年 6 月 9 日）および平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会（平成 24 年 12 月 9 日）での概要を報告しているが、附編 1 に収録した内容がこれに優先する。
- (2) 株式会社加速器分析研究所と藏王町教育委員会との共同研究として、谷地遺跡 S120 穴柱住居出土炭化材・焼骨片から採取した試料の放射性炭素年代測定を平成 26 年度に実施し、その成果を附編 2 に収録した。
4. 本発掘調査とその整理、報告書作成作業は、町単独事業として藏王町教育委員会が実施し、教育施設課文化財保護係が担当した。平成 26 年度の職員体制は下記のとおりである。

教育長 佐藤 広廣	教育経営課長 佐藤 則之	課長補佐 佐藤 浩明	主幹兼文化財保護係長 佐藤 洋一	主査 鈴木 雅
文化財専門職臨時職員 庄子 善昭	鈴木和美	渡邊香織	我妻 なみ	江尻 祥子
文化財室内整理作業員 我妻 英子	岩佐若菜	大島 一彦	大庭 麗志郎	菅野 康一
佐藤 恵子	佐藤 里栄	平井春香	松崎 祐二	松田 律子
			山家 開雄	渡部 真理
5. 本発掘調査と整理作業、本書の作成に際して、下記の諸機関・諸氏よりご指導・ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。

宮城県教育文化財保護課	株式会社加速器分析研究所	相原淳一	阿部 明彦	大場 伸介	川田 雄	菅野 哲則	菊地 逸夫	今野 敏
佐藤啓	田村 正樹	寺内 隆夫	中野 幸夫	早瀬 亮介	福江 格	松本 康	宮地 駿一郎	山田 じょう
								山元 出（敬称略・五十音順）
6. 本発掘調査の整理作業にかかる遺物実測・トレス・遺物写真撮影は、庄子善昭が担当した。
7. 遺構・遺物のトレス図はすべてデジタルトレスにより作成した。
8. 本書の執筆・編集は、鈴木雅が担当した。
9. 本発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、藏王町教育委員会が一括して永久保管している。

# 凡 例

1. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図、調査区配置図・遺構平面図の方は座標北を示している。
2. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図は下記の図帳を使用して作成した。
  - 『藏王町の地形区分と遺跡の分布』(第 1 図)
  - ：5 万分の 1 都道府県土地分類基本図 地形分類図「白石」(宮城県、昭和 58 年調査)
  - 『藏王町遺跡地図・協議箇所位置図』(第 7 ~ 9 図)、「調査地位位置図」(第 10・12・18・22・24・26・33・37・45・46・50・56 図)  
：電子地形図 25000 (国土地理院、自由図郭版・平成 24 年度版・平成 25 年 4 月 9 日調製)
3. トレンド配置図・遺構配置図に記載した現況 GL からの深度は、掘削したトレンド底面の深度であり、遺構残存面と一致しない場合がある。
4. 土色の記述は、「新版標準土色図」(小川・竹原 2005) を参照した。
5. 遺構番号は、遺構種別に圍わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
6. 遺構略号は、下記のとおりである。

S I : 住居跡	S K : 土坑	S D : 構跡	S X : 積石穴状遺構・土器埋設遺構・配石遺構・遺物包含層
-----------	----------	----------	--------------------------------
7. 遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
8. 遺物実測図では、下記の表現方法を使用して記載した。

黒色処理	確認した面の一部に灰色 (K:10%) の塗り
赤 彩	確認した範囲に桃色 (M:30%, Y:40%) の塗り
赤色歯土	確認した範囲に赤色 (M:75%, Y:85%) の塗り
9. 遺物観察表では、下記の表記方法を使用して記載した。

製作工程	調整・加工の痕跡に前後関係が確認でき、痕跡 A より痕跡 B が新しい「A → B」、新旧不明：「A・B」
墨書き	判読不能の文字は「□」で記載した。
計測値	残存量である場合は「( )」を付した。
10. 真空圧版 5 ~ 12 に掲載した遺物の縮尺は任意とし、各写真に遺物の略測定を記載した。
- なお、これらは現在整理作業が進行中であり、接合・修復が充分でない資料も含まれため、本報告の段階と状態が異なる場合がある。
11. 報告書抄録に記載した各遺跡の緯度・経度は、電子国土配信データ上で得修した調査地点付近の緯度・経度（世界地図系）である。
12. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献・報告書については巻末に一括して掲載した。

# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第1章 蔵王町の環境と遺跡	1
第2章 平成25年度の遺跡調査概要	7
第3章 調査の成果	13
第1節 緊急発掘調査	13
1. 愛宕山遺跡 (愛宕神社参道改良計画)	13
第2節 遺構確認調査	19
1. 堀の内遺跡 (個人住宅建築計画)	19
2. 渕坂山B遺跡 (木工所建築計画)	22
第4章 総括	25
参考・引用文献	26
附編1 谷地遺跡発掘調査概報 (平成23・24年度調査)	27
写真図版	36
附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	51
報告書抄録	55



# 第1章 蔵王町の環境と遺跡

## 1. 蔵王町の位置と自然環境

### (1) 地形・地質

蔵王町は宮城県南西部にあり、奥羽山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する（第1・2図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km<sup>2</sup>を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が南東部の松川と白石川の合流点で20mを測る。

町域の6割を山林原野が占めており、西部は高原・山岳地帯、東部は平野・丘陵地帯である。西部は蔵王火山の活動による溶岩台地が発達し、火砕流堆積物からなる扇状地地形も見られる。東部の松川流域には盆地や段丘群が形成されており、沖積平野での稻作と丘陵部での果樹栽培が盛んである。

蔵王連峰は、火口湖（御釜）、渓谷・湿原など変化に富んだ地形を擁し、高山植物をはじめとする多様な動植物が生息・生育する。蔵王国定公園・蔵王高原県立自然公園の指定地域となっているほか、成層火山群の活火山である蔵王火山は地質学的に貴重なフィール



第1図 蔵王町の位置

ドとして「日本の地質百選」に選定されている。

蔵王連峰から東流する松川は、独立峰をなす青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部では2～3段のやや広い段丘面を形成し、北東部では支流の蔽川流域に円田盆地を擁する（第6図）。

円田盆地は東西1.2km、南北3.5kmの底面を持ち、南を除く三方を丘陵で囲まれている。盆地北側から西側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内部を蛇行しつつ南流する蔽川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成している。



第2図 蔵王町と周辺の地形

### (2) 気候

宮城県地方の気候区分は、全体としては温帯湿润気候に属する。温帯湿润気候では、平均气温が最寒月でマイナス3度以上、最暖月で22度以上で四季の変化が明瞭であり、夏に高温多雨となる。宮城県地方はこうした気候の北限に近く、海拔標高が500mを越すと、最寒月の平均气温はマイナス3度以下となり、亜寒帯気候の様相を帯びる。夏季の平均气温は最暖月の8月で25度前後のところが多い。降水量は、年間の平

均値が仙台で1,392ミリ、西部山地で2,000ミリ前後である。積雪日数は、海岸部で30日以下、中央部で50日程度、西部山間部では90日以上に及ぶ。

県南部では、沿岸部は海洋性気候の影響が強く、年較差、日較差ともに小さい。夏季は涼涼、冬季は韓度の割には温暖であり、福島県浜通りの気候の延長線上にある。一方、蔵王町を含む西部内陸方面は福島県中通りの気候の延長線上にあり、より寒冷で積雪も多く、豪雪地帯に指定されている。

### (3) 動植物相

町域の東部は古くから人間活動の場として開発され、青麻山以東の平野・丘陵地帯を中心に水田・畑地などの農耕地が開けている。丘陵地帯では、かつては薪炭材などとして盛んに利用され、萌芽再生によって維持された里山の雜木林に特有のコナラ・クリ林が優勢であった（第3図）。現在はこれらの伐採が進んでスギ・ヒノキ・アカマツが植林されたり、果樹園が開かれてモザイク状の分布を形成している。

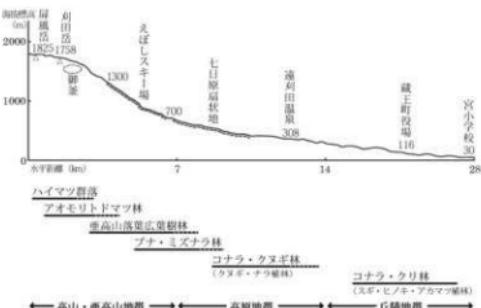
高原地帯も遠刈田温泉から七日原にかけてはコナラ・クヌギ林が優勢であったが、伐採が進んで草原となった後は厳しい気象条件により植生が回復せず、クヌギ・ナラなどの植林・造林が繰り返し行なわれている。鳥帽子岳中腹にかけては冷温帯落葉広葉樹林の山地帯で、広大なブナ・ミズナラ林が形成されている。

西部の亜高山帯では、常緑針葉樹林のアオモリトドマツ林が広大な森林を形成している。屏風岳東面の断崖には亜高山落葉広葉低木林が分布する。

さらに高度を増した高山帯では高木の

生育は見られず、ハイマツ低木林が分布する。山頂付近は火山荒原となり、イワカガミ・コマクサなどの高山植物がカーペット状の群落を形成している。

こうした森林地帯の植物相を背景として、町内には大型獣のニホンツキノワグマ・ニホンカモシカ、中小型獣のホンドタヌキ・ホンドギツネ・トウホクノウサギ・ホンドリス・ホンドイタチ・オコジョ・ムササビ・ネズミ類・モグラ・ヤマネ・コウモリ類などの哺乳動物をはじめとする多様な動物が生息している。



第3図 蔵王町の東西模式断面と植生の垂直分布

## 2. 蔵王町の歴史的環境と遺跡の概況

### (1) 歴史的環境

蔵王町と七ヶ宿町からなる刈田郡は、かつては白石市を含む宮城県南西部の広い地域を占めていた。この刈田・白石地方の地形がつくりだす景観について「刈田郡誌」では「郡下到るところ連丘連山起伏し、谿谷溪流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿つて、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している（刈田郡教育会 1928）。

蔵王東麓の広大な山地・丘陵と、これを限なく開拓する大小の河川は、多種多様な動植物を生息・生育させ、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。このような複雑な地形環境から、歴史時代には軍事上の要衝地域として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなったが、一方で土着の耕作者にとっては耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や耕地の流失もあり、交通の難所でもあった。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老5年（721年）の陸奥国刈田郡建置に関する

記事である。これによると刈田郡は柴田郡のうち二郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は7世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、7世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げていたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれていたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治5年（1189年）に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤（蔵王町円田）に城郭を構え、四方坂（同平沢）との間で源頼朝軍と進退七度に及ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、この地域が軍事上重要な視されており、根無藤から四方坂を経る道筋が、出羽国へ至る出羽道の一部であったことが窺える。

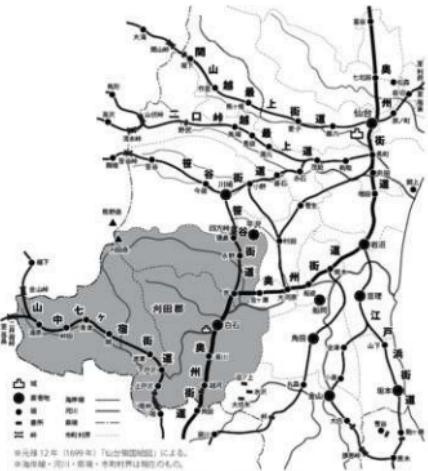
鎌倉時代以降は白石氏（刈田氏）が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正18年（1590年）に豊臣秀吉による

奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、刈田郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長3年(1598年)には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、臣民が白石城主となつたが、政宗は慶長5年(1600年)に徳川家康の命を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となつた。政宗は慶長7年(1602年)に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縱貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿(蔵王町宮)から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠(蔵王町内田)を経由し、笛谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笛谷街道も設けられていた(第4図)。

## (2) 遺跡の概況

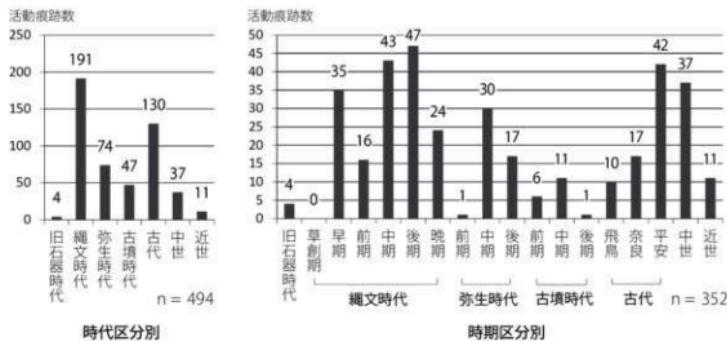
蔵王町内における周知の遺跡は現在194か所を数える(第6~9図、第1表)。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と高木川など支流流域の丘陵上、③内田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。



第4図 刈田郡周辺の街道(風間1983原図)

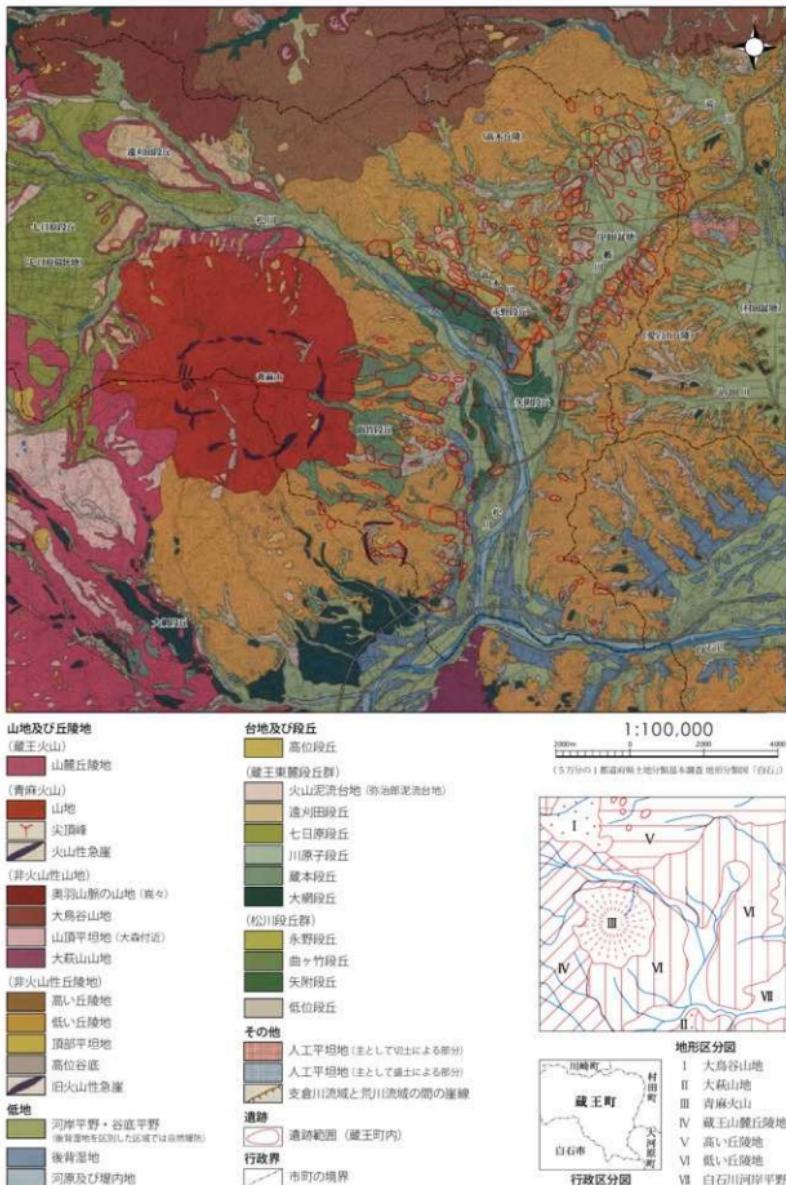
各遺跡に残された活動痕跡を時期区別に集計するとその総数は494か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる(第5図)。

旧石器時代から縄文時代草創期にかけての活動は低調であるが、縄文時代早期になると激増する。前期には半減するが中期に再び増加傾向を示し、後期には活動痕跡が最多となる。晩期には再び半減し、弥生時代前期の活動は低調である。中期には回復するが、その後は段階的な減少傾向が見られ、古墳時代後期の活動は低調である。飛鳥時代以降、再び活動は活発化するが、平安時代の活動痕跡はほとんどが9世紀代に比



\*各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。※時期区分が不明な活動痕跡があるため、時期区分別の合計と時代別の合計は一致しない。

第5図 蔵王町の遺跡における活動痕跡の動態



第6図 蔵王町の地形区分と遺跡の分布

定されるもので古められており、中世に入って13世紀代の活動痕跡が見られるようになるまでの期間は考古学的には空白期となっている。なお、前述のとおり12世紀には奥州藤原氏の影響下で阿弥陀堂が建立されたとみられる。近世に関しては周知の遺跡数は少ない現状にあるが、奥州街道の宮宿をはじめ街道筋を中心へ活動があった。

以下、各時代・時期における活動痕跡を概観する。

**旧石器時代** ナイフ形石器が出土した持長地遺跡など、低位段丘上で4か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い。

**縄文時代** 青麻山東麓の丘陵・段丘上や松川北岸の段丘・丘陵上などに191か所の活動痕跡が認められる。

草創期は明確な活動痕跡が発見されていない。

早期は青麻山東麓の明神裏遺跡・上原田遺跡・沢入D遺跡、松川北岸の手代木遺跡・三本榎A遺跡、七日原扇状地の北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏皿式（林 1962）の標識遺跡である。

前期は青麻山東麓の上原田遺跡・長峰遺跡、松川北岸の西浦遺跡・上曲木B遺跡、七日原扇状地の七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川北岸にかけての段丘上に多く分布する。

中期は青麻山東麓の上原田遺跡・二屋敷遺跡、松川北岸の谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞘堂山遺跡・湯坂山B遺跡などがあり、松川北岸の段丘上に多く分布する。中期前葉の谷地遺跡では住居跡14軒、貯蔵穴55基、遺物包含層などを確認している。土偶などを含む多量の遺物が出土し、拠点的な集落跡と考えられる。鞘堂山遺跡では中期中葉の住居跡5軒、貯蔵穴23基などを確認し、住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山B遺跡では中期後葉の住居跡17軒、貯蔵穴16基などを確認し、土笛などを含む多量の遺物が出土している。

後期は青麻山東麓の二屋敷遺跡・山田沢遺跡、松川北岸の西浦B遺跡などがあり、青麻山東麓の自然堤防上から松川北岸の段丘上に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設構造2基、配石遺構1基などが確認されている。西浦B遺跡では広場を囲むように弧状に配置された後期初頭～前葉の建物跡23棟、貯蔵穴31基などが確認されている。

晩期は青麻山東麓の下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛治沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛治沢遺跡では後期末～晩期末に

かけての土坑墓・土器埋設構造・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた。また、鍛治沢遺跡では中空土偶、願行寺遺跡では屈折土偶が採集されている。

**弥生時代** 74か所の活動痕跡が広範囲に点在する。

前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛治沢遺跡では、縄文時代晚期から継続する墓域で再葬墓が確認されている。

中期は松川北岸の西浦遺跡・円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川北岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地に多く分布するようになり、本地域における遺跡分布の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式（伊東 1955）の標識遺跡である。都遺跡では芻穀庄痕のある土器片が出土している。

後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・礎ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の微高地から丘陵上にかけて多く分布する。

**古墳時代** 47か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地にほぼ限定され、一部が青麻山東麓の微高地に分布する。

集落跡を見ると、前期は円田盆地の大橋遺跡・堀の内遺跡・伊原沢下遺跡・六角遺跡などがあり、丘陵尾根上に立地する。大橋遺跡では住居跡3軒が確認され、県内における塩釜式最古段階の集落跡とみられる。中期は円田盆地の中沢A遺跡・台遺跡・都遺跡・坪田遺跡などがあり、丘陵尾根・微高地に立地する。中沢A遺跡では住居跡9軒が確認され、県内における南北小泉式最古段階の集落跡とみられる。台遺跡では盛土と筏地業による水田跡が確認されている。後期は円田盆地の坪田遺跡で陶器MT15型式期の須恵器が出土しているが、明確な活動痕跡は未確認である。

高塚・横穴古墳を見ると、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋臘堂古墳・天王古墳群・西脇古墳・中屋敷古墳・八幡古墳・青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の微高地に明神裏古墳がある。古峯神社古墳は主軸長約38m、夕向原1号墳は主軸長約57mの前方後円墳。宋臘堂古墳は直径約30mの円墳である。明神裏古墳は墳丘が残存しないが、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。

**古代** 130か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地に拠点的なものを含む活動痕跡が密集し、青麻山東麓から松川北岸にかけての丘陵・段丘・微高地の広範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。

飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡・諏訪館横穴墓群などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。塩沢北遺跡では住居跡3軒が確認され、陶邑TK217型式期の須恵器が出土している。十郎田遺跡では、材木塀による大規模な長方形区画施設と住居跡27軒、建物跡5棟などが確認され、出土した土器群には福島～関東地方との関係を窺わせるものも含まれている。諏訪館横穴墓群は所在を確認できない。

奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡・前戸内遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。六角遺跡では大溝による区画施設と住居跡などが確認されている。住居跡には短い煙道をもつカマドを付設するものがみられ、出土した土器群は福島～関東地方との関係を窺わせるものが主体的である。こうした土器群は円田盆地の複数の遺跡で確認され、移民を伴った外来勢力の移入を強く示唆している。都遺跡では材木塀・大溝による区画施設と建物跡などが確認され、多賀城創建期とみられる軒平瓦が採集されることから官衙関連施設の可能性が考えられている。これらの活動痕跡の多くは奈良時代前半～中頃に位置づけられ、奈良時代後半の明確な活動痕跡は未確認である。

飛鳥～奈良時代の活動痕跡が円田盆地にほぼ限定されるのに対し、平安時代の活動痕跡は青麻山東麓から松川北岸にかけての地域を含めた広範囲に分布する。円田盆地では東山遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・赤鬼上遺跡・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・戸ノ内脇遺跡・松川北岸では西浦B遺跡、青麻山東麓では觀音堂山遺跡・青竹遺跡・二屋敷遺跡・下原田遺跡などがある。東山遺跡・西浦B遺跡・觀音堂山遺跡・赤鬼上遺跡などでは、燃焼部から煙道までの全体を河原石組みで構築したカマドを付設する住居跡が確認されている。東山遺跡では土器溜柵構が確認され、「万田」などの墨書き土器が多量に出土している。前戸内遺跡では、住居跡14軒、建物跡21棟などで構成される拠点的な集落跡が確認されている。集落内には建物跡が逆L字形に配置される一角があり、郷長・百姓クラスの豪族居宅と考えられている。「菊田」「草手」などの墨書き土器が出土している。これらの活動痕跡の多くは平安時代前葉に位置づけられ、平安時代中葉以降の明確な活動痕跡は未確認である。なお、平安時代末葉には円田盆地の丘陵上に「丈六阿弥陀如来坐像」(県指定文化財)を安置した阿弥陀堂が建立されたとみられ、現存する「平沢阿弥陀の杉」(県指定天然記念物)は阿弥陀堂の参道杉並木として植えられたものと伝えられている。

**中世** 37か所の活動痕跡が確認されている。このうち15か所は城館跡で、青麻山東麓の松川に面した丘陵上、松川北岸の丘陵上、円田盆地西縁の丘陵上に分布する。また、城館跡に隣接する段丘・微高地上で屋敷跡が確認されているが、集落跡は未確認である。

城館跡は、青麻山東麓の宮城館跡・山家館跡・館の山城跡・青竹遺跡・曲竹小屋館跡・松川北岸の棚村館跡、円田盆地の矢附館跡・花橋館跡・築館館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。これらの機能時期・内容については詳らかでないが、概ね2km前後の間隔で丘陵突端を駆くように分布することから、相互に関連を持ちながら機能したとみられる。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土壘・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土壘と水堀を伴う方形館である。

城館跡以外では、青麻山東麓の持長地遺跡・二屋敷遺跡、円田盆地の西屋敷遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡・戸ノ内脇遺跡・本宿前遺跡・中組遺跡・堂の入遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡などがある。持長地遺跡は山家館跡・西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている。十郎田遺跡では屋敷跡の一角で確認された井戸跡から多量の木製挽物荒型が出土し、屋敷内で木器生産が行わっていたことが窺われる。

**近世** 遺跡登録上では11か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、近世前半の屋敷跡・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡では近世中頃～後半の墓地が確認されている。宮ヶ内上遺跡は製鉄遺跡とみられる。松川北岸の岩崎山金窯址では、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。伊達家臣の高野家が辯領した平沢要害は遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。

現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅(江戸中期・国指定文化財)、刈田嶺神社本殿(江戸中期・県指定文化財)、円田盆地の奥平家住宅(江戸後期・町指定文化財)、日吉神社本殿(江戸中期)などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡總鎮守として白石城主倉家の保護を受けた。また、街道に関わるものとして青麻山東麓の笛谷街道に曲竹一里塚があり、四方岬付近には古道の一部が保存されている。

このほか、近代遺構として遠刈田製鉄所高炉跡があり、明治時代後期の高炉の基礎部分が現存している。

## 第2章 平成25年度の遺跡調査概要

### 1. 埋蔵文化財保護調整の概要

藏王町内における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は現在192か所を数え、分布調査等による新規発見遺跡も随時追加されている。これらを文化財保護法に基づき適切に保護するため、農地転用および各種開発を行なう際には、事業者に対して埋蔵文化財との関わりについての確認を求め、関わりが予想される場合には宮城県教育委員会と連携して埋蔵文化財保存協議を実施している。協議においては、開発予定地の地下の遺構の有無が不明な場合には「遺構確認調査」、遺構面に影響を与えない工事や施工範囲が狭小な場合、遺構が存在する可能性が低い場合には「工事立会」を行ない、過去に発掘調査済みあるいは遺構が存在しないことを確認済みの場合には「慎重工事」としている。

さらに、遺構確認調査で遺構の分布が確認された場

合には、必要に応じて事業者に計画の変更等を求める、遺跡の現状保存に努めている。また、事業主旨および緊急性などから遺跡の破壊が避けられない場合には、事前に緊急発掘調査（本発掘調査）を行なって遺跡の記録保存を図ることとしている。

平成25年度の発掘届等の件数は15件で、文化財保護法93条に基づく届出14件、同94条に基づく通知1件である。事業内容別では個人住宅4件、住宅兼作業場1件、その他建物2件、電柱6件、その他開発2件、回答内容別では発掘調査7件、工事立会5件、慎重工事3件である。昨年度の状況と比較すると、発掘届等の件数は5件の増加となっている。事業内容別では電柱の件数が増加しているが、個人住宅等の動向に大きな変化は見られない。

### 2. 埋蔵文化財調査の概要

平成25年度の埋蔵文化財保存協議で遺構確認調査・工事立会・慎重工事により現場対応を行なったのは17件（第1表、述べ21遺跡）であった。対応の内訳は、遺構確認調査8件、工事立会6件、慎重工事3件である。

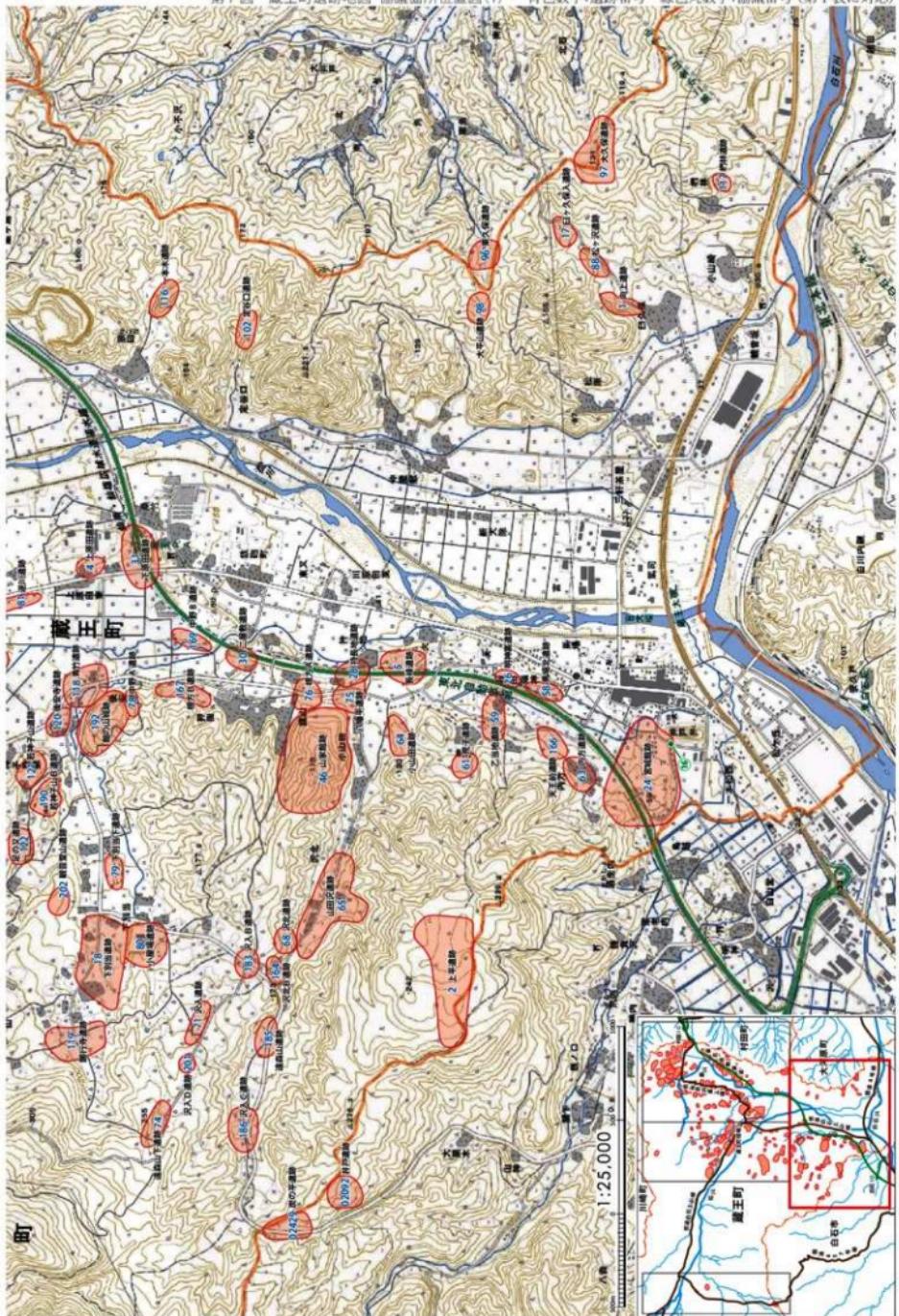
このうち遺構確認調査3件、工事立会1件で遺構を確認した。堀の内遺跡の個人住宅建築予定地では、住居跡4軒、溝跡2条、土坑8基、柱穴16か所などを確認した。この結果を受けて、事業主に対して地下の遺構保護のため盛土を行なった上で施工することを提案し、合意が得られたことから現状保存とした。湯坂山B遺跡の木工所建築予定地では、土坑・柱穴22基などを確認した。遺構を確認した範囲は建物予定部分からは外れていたことから現状保存とした。愛宕山

遺跡の神社参道改良工事予定地では、住居跡1軒を確認した。この結果を受けて、計画の変更について事業主と協議したところ、傾斜地のため路面高を変更することは難しく、参道そのものの移設は新たな掘削範囲が大きくなり遺跡への影響が大きいことが判明した。確認した遺構は既存参道による削平を受けており残存状況が良好でないことから、宮城県教育委員会に判断を仰いだところ事前調査を実施して記録保存を図ることになった。戸ノ内遺跡の集落道2号工事立会では、幅60～80cmで東西方向に延びる溝跡1条を確認した。工事による掘削はこれ以上及ぼないことから現状保存とした。

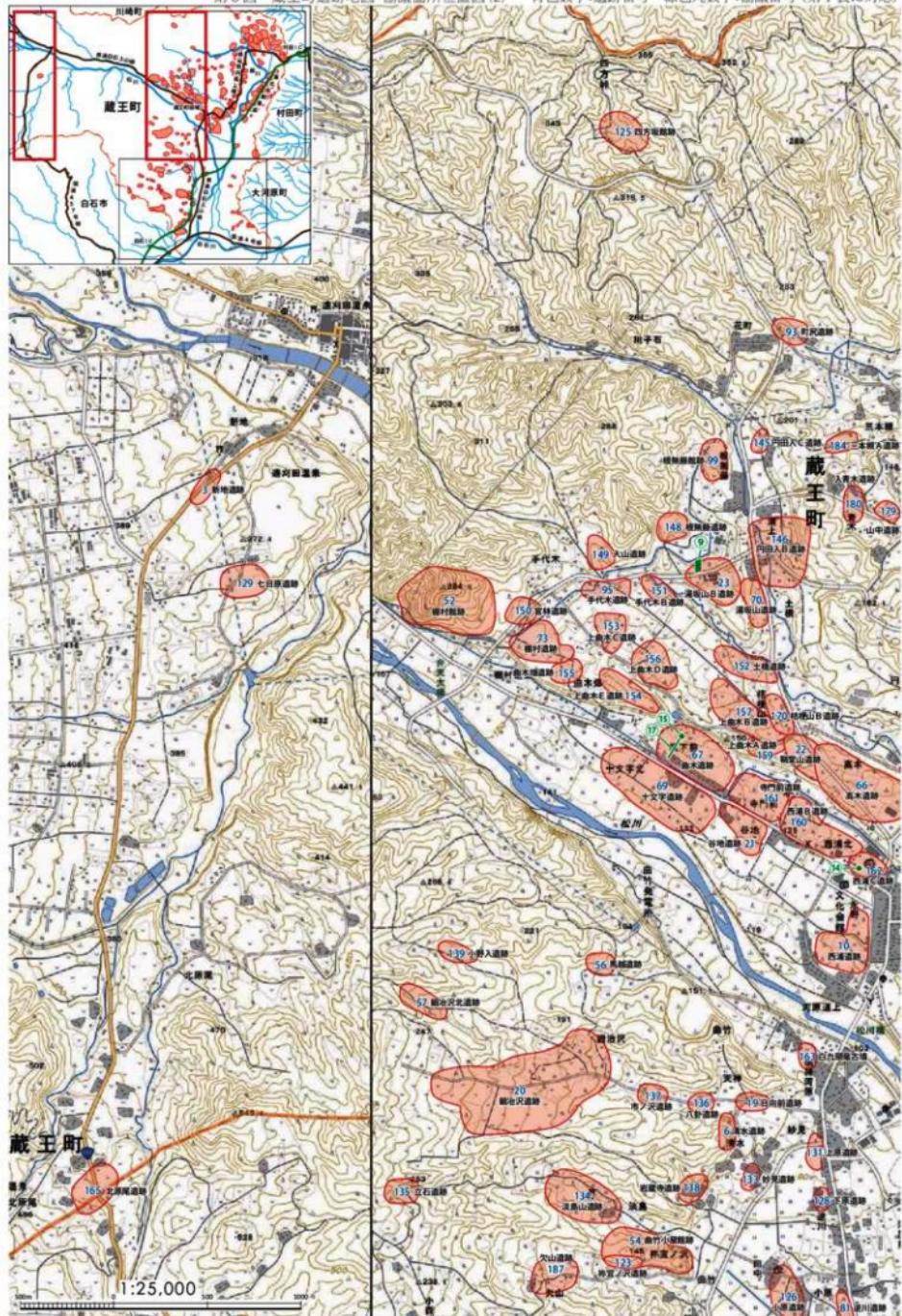
第1表 平成25年度の埋蔵文化財保存協議にかかる確認調査・工事立会・慎重工事一覧（番号アミカケは第2章で報告）

番号	遺跡番号	遺跡名	紀元内容	協調箇所	調査原因	調査期間	対象面積	調査面積	遺構	調査成果
1	05100	小浜道路	確認調査	大字平沢字小浜屋敷1-1、2、3 大字門田字坂の内53.2	個人住宅兼作業場建築	平成25年4月17日	1,573m <sup>2</sup>	1,441m <sup>2</sup>	無	南東面斜面、土壌剖面 柱穴16、土師器・須恵器
2	05084	堀の内道路	確認調査	大字堀内字坂の内25.11	個人住宅建築	平成25年4月18日	215m <sup>2</sup>	1,13m <sup>2</sup>	有	東西南斜面、住居4・溝2・土坑8・ 柱穴16、土師器・須恵器
3	05077	戸ノ内駆道跡	慎重工事	大字堀内字坂の内25.11	電柱設置工事	-	0.2m <sup>2</sup>	-	無	砂礫層
4	05108	前戸内駆道跡	工事立会	大字小林字坂二木本地区内	電柱設置工事	平成25年5月13日	7.5m <sup>2</sup>	-	無	南西面斜面
5	05044	大根道路	確認調査	大字平沢字屋木坂内81.3	個人住宅建築	平成25年7月16日	11.5m <sup>2</sup>	38m <sup>2</sup>	無	造底面
6	05200	福竹林道路	確認調査	大字小林字坂福竹林4.3	祇園神社参道改修工事	平成25年9月10日	60m <sup>2</sup>	20m <sup>2</sup>	無	南向斜面、土坑1・柱穴22、繩文土器・ 板瓦1
7	05077	戸ノ内駆道跡	慎重工事	大字堀内字坂の内25.13	個人住宅建築	-	393m <sup>2</sup>	-	無	砂礫層
8	05044	大根道路	工事立会	大字平沢字屋木坂内81.3	電柱設置工事	平成25年11月28日	0.6m <sup>2</sup>	-	無	南向斜面、土坑1・柱穴22、繩文土器・ 板瓦1
9	05023	福坂山B道路	確認調査	大字門田字和大原9.1	木工所往來	平成25年12月4日	2,328m <sup>2</sup>	104m <sup>2</sup>	有	砂礫層
10	05012	愛宕山山道跡	確認調査	大字平沢字立田8.1	愛宕神社参道改良工事	平成25年12月10日～11日	46m <sup>2</sup>	40m <sup>2</sup>	有	南向斜面、住居1・土師器・削片
11	05105	十飯田道路	工事立会	大字小林地区内	電柱設置工事	平成25年12月11日～13日	24m <sup>2</sup>	-	無	粘土・砂礫層
12	05048	西小島駆道跡	慎重工事	大字小林地区内	県営ほ場整備事業(円田2期地区)集落道2号工事	平成25年12月12日 平成26年1月7日～17日	230m <sup>2</sup>	-	有	南東面斜面、戸ノ内遺跡：溝1
13	05196	西原駆道跡	工事立会	大字門田地区内	県営ほ場整備事業(円田2期地区)集落道2号工事	-	351m <sup>2</sup>	-	無	南向斜面
14	05197	戸ノ内駆道跡	確認調査	大字門田字西浦北10	駐車場整備工事	平成26年1月7日	88m <sup>2</sup>	17m <sup>2</sup>	無	南向斜面
15	05197	西浦C道路	工事立会	大字門田字坂下前地区内	電柱設置工事	平成26年3月3日	4m <sup>2</sup>	-	無	口一云層、繩文土器1片
16	05024	呂城駆跡	確認調査	宮台字台地内	町道御神籠石改良工事	平成26年3月4日	400m <sup>2</sup>	17m <sup>2</sup>	無	河川堆積物、鰐形窓？、陶器片
17	05067	曲木道路	工事立会	大字門田字坂下前地区内	電柱撤去工事	平成26年3月5日	4m <sup>2</sup>	-	無	-

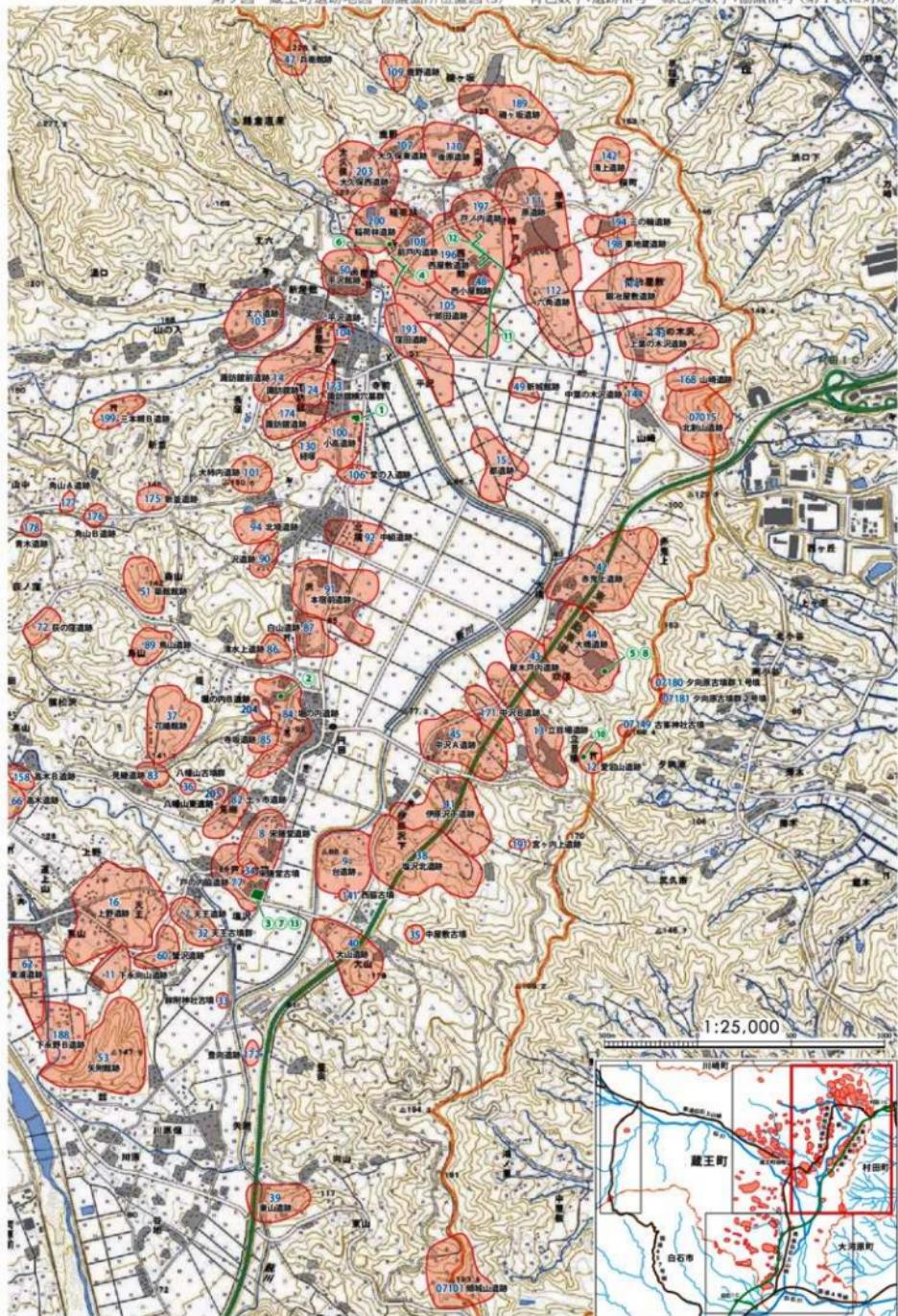
第7図 藏王町遺跡地図・協議箇所位置図(1) 青色数字:遺跡番号 緑色丸数字:協議番号(第1表に対応)



第8図 藏王町遺跡地図・協議箇所位置図(2) 青色数字:遺跡番号 緑色丸数字:協議番号(第1表に対応)



第9図 藏王町遺跡地図・協議箇所位置図(3) 青色数字:遺跡番号 緑色丸数字:協議番号(第1表に対応)



第2表 蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	白山遺跡	散布地	古墳、古代	101	大神内遺跡	散在地	弥生
2	上平遺跡	散布地	縄文、古代	102	定山遺跡	散在地	縄文、古代
3	新地遺跡	散布地	古代	103	十六塚遺跡	散在地	古代
4	下田山遺跡	散布地	縄文～後、古墳、古代	104	平沢遺跡	散在地	古代
5	立峰遺跡	散布地	縄文、中・後、古墳	105	十郎の遺跡	散在地	縄文、古墳～中～地、飛鳥～平安、中世、近世
6	御木遺跡	散布地	縄文、弥生～後	106	室の人の跡	散在地	弥生、古代、中世
7	天子遺跡	散布地	縄文～中、弥生～後、古墳	107	大久保遺跡	散在地	古墳、奈良、平安
8	48室堂遺跡	散布地	秀生～中、古墳、平安	108	前川内遺跡	散在地	江戸後、繩文後、秀生～中・後、古墳中、奈良、平安、中世、近世
9	石野跡	散布地・水田	秀生～中、古墳、後、平安、中世、近世	109	他野遺跡	散在地	古代
10	西山遺跡	集落・散布地	縄文～後、古墳、後、平安	110	鬼原遺跡	散在地	縄文、古墳、奈良、平安
11	下木山遺跡	散布地	縄文、秀生～中、後、古墳	111	原遺跡	散在地	古代
12	愛宕山遺跡	散布地	古墳～後、古墳、後、古墳	112	六角遺跡	散在地	縄文、平安～後、古墳前・後、奈良・後、奈良、平安、中世、近世
13	77号墓跡	散布地	縄文、秀生～後、古墳	113	羽治内遺跡	散在地	縄文～中～地、古代、近世
14	海老原引手跡	集落・散布地	縄文、秀生、古墳前～中、平安	114	一本木遺跡	散在地	縄文～中・後
15	御前跡	集落	縄文、秀生、古墳前～中、後、古墳前～後、飛鳥～平安、室生	115	竹林遺跡	散在地	古代
16	小野木遺跡	散布地	縄文、秀生、中、平安	116	寺谷遺跡	散在地	縄文、後、秀生後、平安、中世、近世
17	14ヶ月久人跡跡	散布地	縄文、中、古墳	117	門山遺跡	散在地	縄文、後、秀生後、平安、中世、近世
18	下羽当遺跡	散布地	縄文～中、後	118	寺谷遺跡	散在地	縄文、後、秀生後、平安、中世、近世
19	日向の遺跡	散布地	縄文～中、後	119	御行寺跡	散在地	奈良・後、秀生後、古墳、中世
20	鶴の内遺跡	散布地	縄文～中、後、秀生～後、古墳	120	後安寺跡	散在地	古代
21	石地遺跡	散布地	縄文～中、後、秀生～後、古墳	121	若神山内遺跡	散在地	縄文、後
22	石地遺跡	散布地	縄文～中～後	122	心の穴跡	散在地	縄文、中～後
23	新地山遺跡	散布地	縄文、後、秀生、古代	123	舟宮山遺跡	散在地	縄文、後
24	湯加山日遺跡	集落・散布地	縄文、秀生、後	124	加瀬御跡	城跡	中世
25	800年遺跡	散布地	古墳、秀生～中、平安	125	四方丸遺跡	城跡	中世
26	800年遺跡	散布地	古墳、秀生～中、平安	126	小原遺跡	散在地	縄文、平安
27	古奥山遺跡	散布地	縄文、秀生～中	128	上原遺跡	散在地	縄文～中
28	行地遺跡	集落	古石畠、縄文～後、秀生、古墳、古代、中世	129	七日山遺跡	散在地	縄文初
29	100年遺跡	集落	縄文～中、後、秀生、古墳、古代	130	跡跡	跡跡	中世
30	100年遺跡	集落	縄文～中、後、秀生、中世	131	上原遺跡	散在地	縄文、後
31	下木山遺跡	集落	縄文～中～後、秀生、後、平安	132	寺見跡	散在地	縄文、中
32	天子山遺跡	円墳	古墳	133	虎島山遺跡	散在地	縄文、後
33	御前神の内遺跡	古墳？	古墳？	134	虎島山遺跡	散在地	縄文、後、古墳
34	米代堂山遺跡	方墳	古墳	135	立石遺跡	散在地	縄文、後
35	牛伏山遺跡	円墳	古墳	136	八卦山遺跡	散在地	縄文
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳	137	布ノ原山遺跡	散在地	秀生、古墳
37	猪之原跡	城跡	中世	138	糸引山古墳跡	散在地	縄文、後、古代
38	猪之原跡	集落	秀生～中、後、古墳前、後、古墳	139	小野人跡	散在地	縄文、平安～中～後、古墳
39	猪之原跡	集落	縄文～中、後、秀生、中世	141	西脇山遺跡	円墳	古墳
40	猪之原跡	集落	縄文、平安	142	清川山遺跡	散在地	古代
41	伊豆野下山遺跡	集落	縄文、秀生、古墳前	143	上葉の木村遺跡	散在地	古代
42	小曳上山遺跡	集落	秀生～中、後、平安、中世	144	中葉の木村遺跡	散在地	縄文、秀生、古代
43	星の内遺跡	散布地	秀生～中、古代	145	円田山A遺跡	散在地	縄文
44	八幡山遺跡	集落	縄文、秀生～中、後、古墳前、後、古墳	146	円田山B遺跡	散在地	縄文、早・中
45	中村山遺跡	散布地	縄文、秀生～中、後、古墳前、後、古墳	147	猪無原山遺跡	散在地	縄文、早・中、後、古墳
46	山形山遺跡	城跡	中世	148	人仁山跡	散在地	縄文、早、秀生、古代
47	只見山遺跡	城跡	中世	150	千代木跡	散在地	縄文
48	只見山遺跡	城跡	縄文、秀生、古代、中世	151	子代木A遺跡	散在地	縄文、早・後、古代
49	新山遺跡	散布地・城跡	秀生、古墳～古代	152	上根御跡	散在地	縄文、後、秀生
50	平子山遺跡	城跡	中世	153	山田C山遺跡	散在地	縄文、中
51	磐根山遺跡	城跡	中世	154	「山田C」山遺跡	散在地	縄文、前・中
52	櫛木山遺跡	城跡	中世	155	山田木原跡	散在地	縄文
53	矢利山遺跡	城跡	中世	156	「山田C」山遺跡	散在地	縄文、中
54	山田木原跡	城跡	中世	157	「山田C」山遺跡	散在地	縄文、早～中、古代
55	高木山遺跡	城跡	中世	158	馬木山跡	散在地	縄文
56	丸山遺跡	散布地	縄文	159	「山田A」山遺跡	散在地	縄文、早、秀生、古代
57	御前が丘遺跡	散布地	縄文～中、後、古代	160	西浦山遺跡	集落・散在地	縄文、中～地、後、秀生、平安、中世、近世
58	丸山北山遺跡	散布地	縄文、平安	161	丹門御跡	散在地	縄文、中
59	弓削山遺跡	散布地	古石畠、縄文、平安	162	西浦山遺跡	散在地	縄文、前～後、秀生、奈良、平安
60	蟹野山遺跡	秀生～中		163	古九郎山古墳	古墳	
61	弓削山遺跡	散布地	古石畠	164	北北山遺跡	散在地	縄文、後
62	東山遺跡	散布地	縄文	165	北北尾遺跡	散在地	縄文、早
63	内山遺跡	散布地	古	166	天王山跡	散在地	縄文、古
64	小山田遺跡	散布地	縄文、古代、中世	167	魅力の山跡	散在地	古代
65	山田山遺跡	散布地	縄文～中	168	山崎御跡	散在地	縄文、早
66	高木山遺跡	散布地	縄文	169	中野山遺跡	散在地	縄文
67	山木山遺跡	散布地	縄文	170	猪俣山B遺跡	散在地	縄文
68	江戸山遺跡	散布地	縄文～中、後	171	中川山遺跡	散在地	秀生、中、古墳、古代
69	14文字跡	散布地	縄文	172	青石山跡	散在地	古墳
70	高木山山遺跡	散布地	縄文～中～後	173	高木山の六個跡	散在地	古墳？
71	内山遺跡	散布地	縄文～中、後、古	174	高木山山遺跡	散在地	秀生、古墳
72	45号山遺跡	散布地	縄文、秀生	175	新里山遺跡	散在地	縄文、中
73	梅木山遺跡	散布地	縄文	176	角山山遺跡	散在地	縄文
74	浅虫山下山遺跡	散布地	縄文	177	角山山遺跡	散在地	古代
75	越平山遺跡	散布地	縄文	178	佐木山遺跡	散在地	平安
76	猪俣山遺跡	散布地	縄文	179	中山山遺跡	散在地	平安
77	内山山内山遺跡	散布地	縄文～中、後、秀生、中世、古墳	180	人吉木山跡	散在地	縄文
78	中野山遺跡	散布地	縄文	181	人吉木山跡	散在地	縄文
79	14号下山遺跡	散布地	縄文	182	人吉木山跡	散在地	縄文
80	小野木山遺跡	散布地	縄文	183	田代山遺跡	散在地	縄文、平安
81	猪俣山遺跡	散布地	縄文～前	184	下木山A遺跡	散在地	縄文、中
82	14号山遺跡	散布地	秀生	185	森原山遺跡	散在地	縄文、中？
83	弓削山遺跡	散布地	古石畠	186	人吉木山跡	散在地	縄文
84	猪俣山遺跡	散布地	縄文	187	人吉木山跡	散在地	縄文
85	牛子山遺跡	散布地	平安	188	下木山B遺跡	散在地	平安
86	猪俣山遺跡	散布地	秀生、平安	189	猪ケ丘山遺跡	散在地	平安
87	猪俣山遺跡	散布地	秀生、古	190	石神山「白」山遺跡	散在地	縄文、後
88	猪俣山遺跡	散布地	古	191	西ヶ丘「白」山遺跡	散在地	縄文
89	猪俣山遺跡	散布地	古	192	猪俣山山遺跡	散在地	平安
90	猪俣山遺跡	散布地	古	193	田代山遺跡	散在地	縄文、後、古墳中、後、飛鳥～平安、中世
91	本山山内山遺跡	散布地	縄文、秀生、中世、平安、中世	194	「山代木」山遺跡	散在地	縄文、後、秀生、平安、中世、近世
92	中野山遺跡	散布地	縄文～中、後、秀生、平安、中世	195	長根山「白」山遺跡	散在地	縄文、後、秀生、平安
93	和泉山遺跡	散布地	縄文	196	内屋山遺跡	集落	縄文、秀生、後
94	赤坂山遺跡	散布地	縄文	197	ノゾウ山A遺跡	散在地	縄文、秀生、後
95	赤坂山遺跡	散布地	縄文、秀生、後	198	東地山遺跡	散在地	縄文、中～古
96	東北木山遺跡	散布地	古	199	三本木山B遺跡	散在地	縄文、平安
97	久久保山遺跡	散布地	縄文～中	200	明神山遺跡	散在地	縄文、平安
98	大木山遺跡	散布地	縄文	201	入久山遺跡	散在地	縄文、古
99	和泉山遺跡	城跡	中世	202	綱合山山遺跡	散在地	縄文、後、平安
100	小木山遺跡	散布地	縄文、秀生、古	203	大久保山遺跡	散在地	古墳、後、平安

番号は遺跡地図の青色数字と対応。宮城県遺跡台帳登録番号のうち番号番号05を省略した下三桁と共に、矢番の記載は省略した。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 緊急発掘調査

#### 1. 愛宕山遺跡

##### 調査要項（第1表10）

遺跡名：愛宕山遺跡（遺跡登録番号 05012）

調査原因：愛宕神社参道改良工事計画

調査箇所：蔵王町大字平沢字立目場 81

調査期間：平成25年12月10日（確認調査）

平成25年12月10日～11日（本調査）

調査面積：40m<sup>2</sup>

調査主体：蔵王町教育委員会

調査員：鈴木雅

##### 遺跡の概要

円田盆地と村田盆地を画する愛宕山丘陵の尾根上に立地し、弥生・古墳時代の散布地として登録されている。本遺跡中央部の標高は約169mで、平地との比高差は西側の円田盆地から約90m、東側の村田盆地から約140mを測る高所に立地している。周辺には本遺跡と連続する尾根上に古峯神社古墳、夕向原古墳群が分布する。本遺跡では平成8年に藤沢敦氏による測量調査が行なわれ、古墳の可能性が検討されたが、古墳に関する地形は確認されていない（藤沢2000）。平成24年には神楽殿再建計画に伴う発掘調査（町18集）を実施し、古墳時代の袋状土坑（貯藏穴）などを確認している。



第10図 愛宕山遺跡調査地点位置図

##### 調査に至る経緯

愛宕神社参道は丘陵頂部から西斜面にかけて切り通し状に設けられているが、未舗装のためローム質の土が露出し雨天時には危険な状態となっていた。このため、参道路面の表層約20cm程度を攪拌してセメントを混和し、締め固める改良工事が計画されたが、神社境内は愛宕山遺跡の範囲に含まれていたことから、愛宕神社参道保全対策事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が平成25年11月22日付けで愛宕神社氏子総代会代表より蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。県教育委員会からは12月6日付けで確認調査を実施する必要があるとの回答書が出された。これを受けた蔵王町教育委員会が12月10日に確認調査を実施したところ、焼土を伴う土坑状の掘り込みが確認された。これを受けて事業主と計画の変更について協議した結果、傾斜地のため路面高を変更することは難しく、参道そのものの移設は新たに掘



写真1 遺跡遠景（西から）



写真2 調査前現況（西から）



第11図 愛宕山遺跡調査区配置図（藤沢2000「愛宕山遺跡測量図」に加筆）



写真3 調査区全景（西から）



写真4 遺構確認作業（西から）



写真5 遺構精査作業（北西から）

削範囲が大きくなり遺跡への影響が大きいことが判明した。確認した遺構は既存参道による削平を受けており残存状況が良好でないことから、宮城県教育委員会に判断を仰いだところ事前調査を実施して記録保存を図ることになった。発掘調査は12月10日から11日までの2日間を要した。

### 調査の成果

①調査区周辺の地形 東西約40m、南北約20mほどの平坦面が愛宕神社の境内地となっており、その西側斜面部に東西方向に延びる既存参道上に幅1.6m、長さ25mの調査区を設定した（第11図・写真3）。調査区の表土除去を行なったところ、漸移層・ローム層の削平面が露出し、既存参道の開削時に最大で厚さ100cm程度の切土が行なわれていることを確認した。遺構確認面の標高は西側に向かって低く、調査区東端と西端で約3.6mの比高差がある。

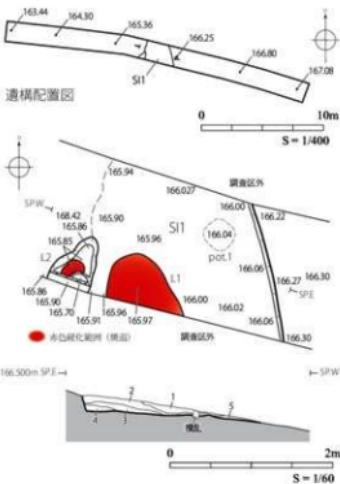
②発見された遺構と遺物 遺構はトレンチ中央部の標高166.0m付近で1か所確認した。堆積土に焼土・土器片を含む。平面形が不整な橢円形を呈することから土坑状の掘り込みと考えて掘り下げるを行なったが、精査の結果、赤色硬化範囲を含む床面を確認したことから、既存の参道の開削によって削平を受けた竪穴住居跡の一部であることが判明した。



写真6 SI1 住居跡床面検出状況（北から）



写真8 SI1 住居跡断面（北から）



第12図 愛宕山遺跡 SI1 竪穴住居跡



写真7 SI1 住居跡床面（北から）



写真9 SI1 住居跡遺物出土状況（南から）

【SI1 穴竪住居跡】(第12図) 東西3.0m以上、南北1.6m以上の規模を確認した。西側は削平により消失しており、南・北側は調査区外へ延びているため全体の規模・形状は不明である。方位は住居東辺でN-13°-Wである。住居壁面は東壁のみ確認し、地山を壁とする。残存壁高は最大24cmである。床面はほぼ平坦で、全体的に硬化している。住居中央付近と見られる位置の長軸100cm以上、短軸約80cmの範囲で焼面を確認した。また、この焼面の西側に隣接して確認した長軸70cm以上、短軸約50cmの皿状の窪みの底面でも直径約25cmの範囲で焼面を確認した。

遺物は住居東壁付近の堆積土4層上面で土師器壺(pot.1、第14図1)、堆積土から土師器壺(第13図1)・甕・小型品など、弥生土器(第13図3～5)、珪質頁岩製剥片、遺構確認面から土師器高环(第13図2)が出土した。また、焼面北側の床面直上で炭化木片がやまとまって出土した。

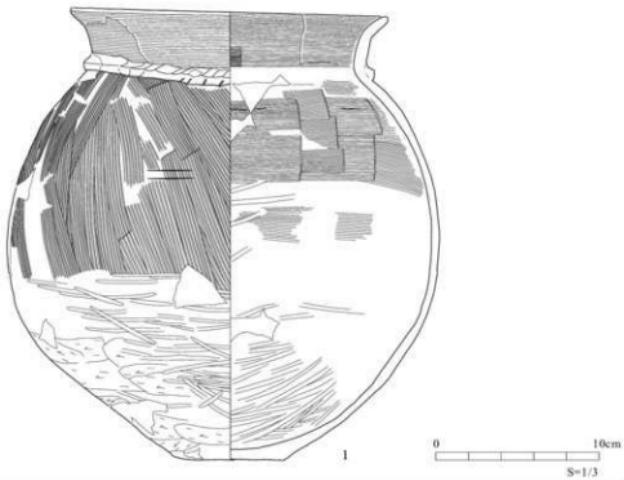
【その他の出土遺物】遺構確認面・表土から土師器環・壺・甕・小型品、黑色頁岩製二次加工ある剥片、流紋岩製剥片が出土した。土師器環は内外面に赤彩を施すもの、内面に黒色処理を施すもの(第13図2・4)がある。土師器壺は頸部～体部の外面に赤彩を施す。

### ③遺物の特徴と編年的位置づけ

SI1 穴竪住居跡では、堆積土中から土師器壺(第14図1)と壺(第13図1)、弥生土器(第13図3～5)、遺構確認面から土師器高环(第13図2)が出土した。土師器壺は脇部最大径を中位に持つ球胴形で、頸部が直立して口縁部が外反する。頸部の外面に幅1cm程度の粘土紐貼り付けによる隆帯を持ち、爪先状工具による斜位の刻み目を連続的に施す。器面調整は外面の脇部上半にハケメ調整、脇部下半にヘラケズリの後でヘラミガキ調整、内面の脇部にヘラナデの後で脇部下半にヘラミガキ調整、口縁部の内外面にヨコナデ調整を施す。壺は口縁部の破片で、内外面にヘラミガキ調



第13図 愛宕山遺跡出土遺物（1）



No.	遺構名	層位	種類	形態	断面調整・特徴		法量(cm)	直径	高さ	残存	登録
					外面部	内面部					
1	S1	堆积土4層上面 pot.1	土師器	甌	(脚上) ハケメ→(底) 薄帶貼付→脚付・(脚下) ヘラケズリ→ヘラミガキ、(口) ヨコナデ (内面) ヨコナデ、(底) ヘラナデ→(脚下) ヘラミガキ 外面部(脚)・内面部(底) 集灰付剖面 剥取跡大径 26.0cm 垂直式	(19.5)	6.8	27.3	1/2	AT-01	

第14図 愛宕山遺跡出土遺物（2）

整の後で赤彩を施す。高环は脚上部から环底部の破片で、脚柱状部は中空である。これらの特徴から、出土した土師器は古墳時代前期の塙釜式に概ね比定できると考えられる。

なお、高环は脚上部から环底部の破片であるが、色調の異なる二種類の胎土が用いられていることから製作工程の一端が窺える（第13図2）。はじめに黄褐色の胎土で脚部とその上部に逆ハ字形で上面が平坦な台状となる环底部を形成し、その上に赤色の胎土で环全体を形成している。この結果、外観は脚部が黄褐色、环部が赤色を呈したと考えられる。

また、遺構外で内面に黒色処理を施す土師器环の小片（第13図2・4）が出土した。小片のため特徴が

明らかでないが、古墳時代後期～奈良時代に位置づけられる可能性がある。

④遺構の特徴と性格 SII住居跡は調査範囲が狭小なため全体の規模・形状は不明であるが、中央付近の床面に地床炉をもつ住居と考えられる。主柱穴およびその他の施設は確認されなかった。

⑤まとめ 古墳時代前期の竪穴住居跡1軒を確認し、集落が営まれていたことが判明した。集落の性格については平地との比高差が90m以上の高所立地という点で特異であり、本遺跡と連続する尾根上に分布する複数の古墳との関連も考えられる。また、遺構は未確認であるが、古墳時代中期・後期～奈良時代と考えられる遺物も出土している。

## 第2節 遺構確認調査

### 1. 堀の内遺跡

調査要項（第1表2）

遺跡名：堀の内遺跡（遺跡登録番号05084）

調査原因：個人住宅建築計画

調査箇所：藏王町大字円田字堀の内53-2

調査期間：平成25年4月18日

調査面積：113m<sup>2</sup>

調査主体：藏王町教育委員会

調査員：鈴木雅

#### 遺跡の概要

縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の集落・散布地として登録されている。平成元年に町立円田幼稚園建設計画に伴う発掘調査（町1990年刊）、平成8年に農道白山八塙線改良計画に伴う発掘調査（町1集）を舌状丘陵先端部の東向斜面でそれぞれ実施し、塩釜式・南小泉式・栗圓式→国分寺下層式・表杉ノ入式期の住居跡などを確認している。

#### 調査の成果

建築計画範囲にトレチ2か所を設定して確認調査を実施したところ、比較的濃密な遺構の分布を確認した。遺構は重複が著しく性格を推定できないことから、トレチを抵張して建築計画範囲全体の遺構分布状況を把握することにした。

調査区内の旧地形は舌状丘陵先端部の東向緩斜面で、西部でローム層の削平面、東部で漸移層を確認した。遺構は竪穴住居跡4軒、溝跡2条、土坑8基、柱穴16か所を確認した。このうちP1柱穴の一部掘

り下げを行なったところ、柱材抜き取り痕跡から完形の土師器壺などが出土した。遺物はP1柱穴の柱材抜き取り痕跡から土師器壺・甕、遺構確認面から土師器壺・高壺・器台または高壺・壺か・甕・須恵器蓋・甕などが出土した。

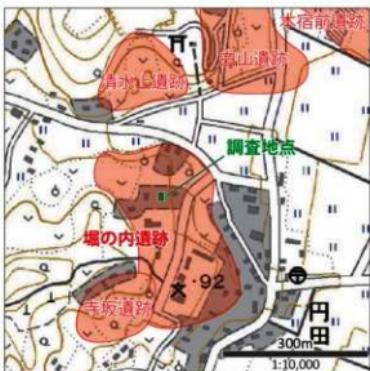
上記の調査結果を受けて事業主・県教育委員会・町教育委員会の3者で協議した結果、建物基礎の施工で地下の遺構が影響を受けないよう、盛土を行なった上で施工することで事業主の了解が得られたことから、確認した遺構は現状保存とした。



写真10 調査地点遠景（北東から）



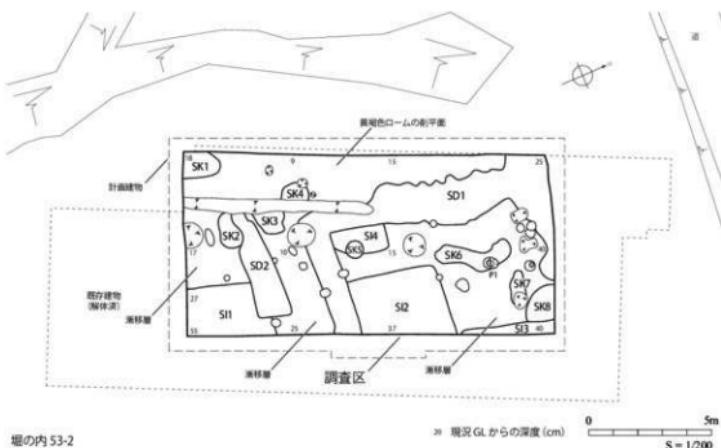
写真11 調査前現況（東から）



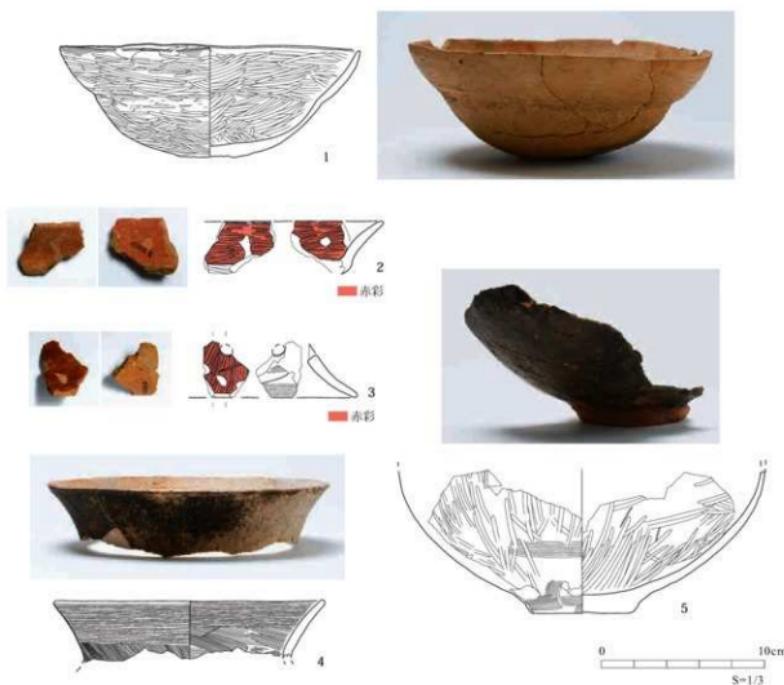
第15図 堀の内遺跡調査地点位置図



写真12 調査前現況（南から）



第16図 堀の内遺跡調査区・遺構配置図



### 第17図 堀の内遺跡出土遺物（1）



写真 13 遺構確認状況（南から）



写真 14 遺構確認状況（北から）



写真 15 P1 柱穴断面（北から）



写真 16 P1 柱穴遺物出土状況（北から）



写真 17 トレンチ掘削作業（南から）



写真 18 遺構実測作業（北西から）

No.	遺構名	層位	種類	測量	測量説明・特徴	法線 (cm)			測方	壁厚
						上段	中段	下段		
1	P1	柱材抜取痕跡	土師器	坪	外縁：ナラ→ヘラケヌリ→ヘラミガキ。①)ヨコナダ。理由部に工具痕 内縁：ナラ→ヘラミガキ。縦巻式	18.6	3.6	6.0	充てん	MI-01
2	-	遺構確認面	土師器	高坪	外縁：(坪底)→(底) ヘラミガキ→(底面) 赤絞 内縁：(坪底口)→ヘラミガキ→小鉢 現存高 3.3cm 縦巻式				一部	MI-05
3	-	遺構確認面	土師器	高坪	外縁：(側面) ヘラミガキ→小鉢 内縁：(側面) ヘラミガキ→小鉢 側面：透視上勾張 現存高 3.5cm 縦巻式				一部	MI-04
4	P1	柱材抜取痕跡	土師器	盤	外縁：(上) ハケヌメヨコナダ、内縁：(下) ナダ→ハケヌメヨコナダ 外縁：(上) 保坂行物 現存高 3.8cm	16.8			一部	MI-02
5	-	遺構確認面	土師器	側か	外縁：(側) ヘラナダ→ヘラミガキ。(底) ハケヌメヨコナダ 内縁：(側-底) ヘラナダ→ヘラミガキ 外縁：(側) 泥化物行物 現存側面 22.8cm 現存高 9.0cm		6.3		一部	MI-06
6	-	遺構確認面	測定器	盤	外縁・内縁：ロコナダ ツバメ巣形：(2) cm				一部	MI-03

第18図 堀の内遺跡出土遺物（2）

## 2. 湯坂山B遺跡

### 調査要項（第1表9）

遺跡名：湯坂山B遺跡（遺跡登録番号 05023）

調査原因：木工所建築計画

調査箇所：藏王町大字円田字和大原 9-1

調査期間：平成 25 年 12 月 4 日

対象面積：2,328m<sup>2</sup>

調査面積：104m<sup>2</sup>

調査主体：藏王町教育委員会

調査員：鈴木雅・庄子善昭

### 遺跡の概要

縄文・弥生時代の集落・散布地として登録されている。平成 3 年に町道堀の内柵倉線改良計画に伴う発掘調査を実施し、大木 9・10 式期の住居跡・貯蔵穴・埋設土器遺構などを確認している。

### 調査の成果

建築計画範囲と配管埋設部を中心にトレンチ 8か所を設定して確認調査を実施した。

調査区内の旧地形は南から入る埋没谷地形の谷頭付近にあたり、南向緩斜面となっている。建築計画範囲に設定した 1 ~ 4T では、黒ボク層・漸移層・ローム層の削平面を確認した。遺構は確認されなかった。配管埋設部にあたる進入路に設定した 5 ~ 8T では、漸移層上面で土墳・柱穴 22 基の分布を確認した。これらの遺構群は平成 3 年調査で確認した遺構群の北西側の分布限界と考えられる。遺物は 1 ~ 2T の黒ボク層から縄文土器、敲石、剥片、7 ~ 8T の堆土から縄文土器が出土した。なお、2T では黒ボク層中に青灰色・褐色の火山灰と見られる 2 枚の堆積層が確認された。



第19図 湯坂山B遺跡調査地点位置図



写真 19 調査地点遠景（東から）



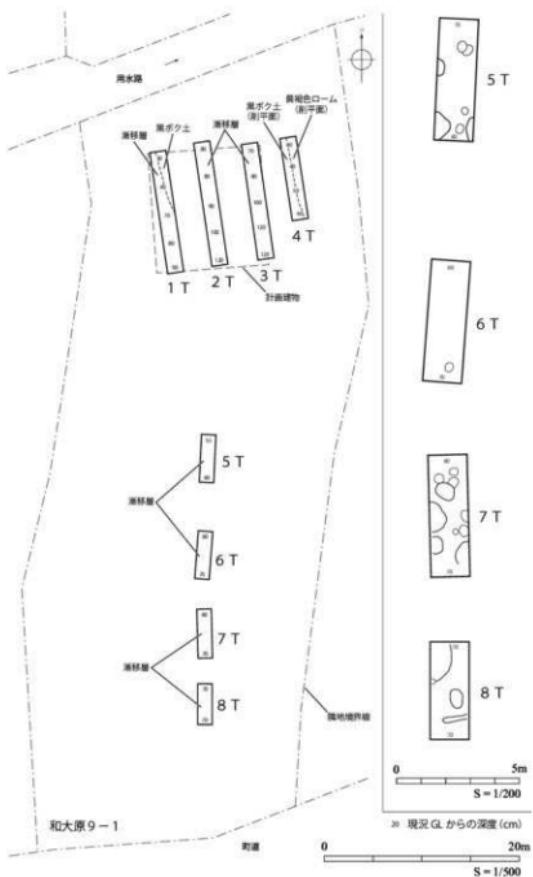
写真 20 調査前現況（南から）



写真 21 調査前現況（北部・南から）



写真 22 調査前現況（北部・東から）



\*デジタル処理によるパノラマ合成写真

建築計画範囲には遺構が分布しないこと、配管埋設部の掘削深度は遺構面に及ばないことから、確認した

遺構は現状保存とした。



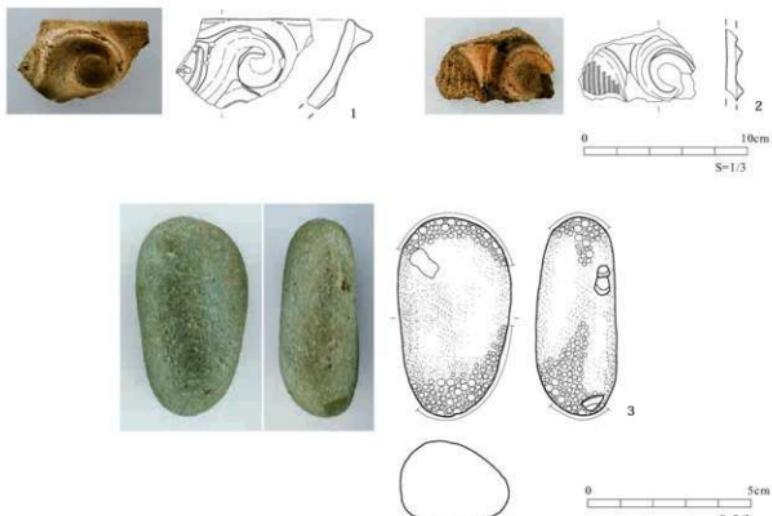
写真 26 5T (北から)



写真 27 7T (北から)



写真 28 8T (北から)



No.	遺構名	層位	種類	測定	測定調整・特徴			法量 (cm)	現存	登録
					長	幅	厚			
1	志桜	縄文土器	深鉢	縄文	遺物其陳縄文	大木丸式	周厚 6.0mm			
2	7T・黒ボク上層	縄文土器	深鉢	縄文(縦)	遺物其陳縄文	大木丸式	周厚 6.0mm			
3	7T・黒ボク上層	磚石層	磚石	鉛鉄製	上下端部: 錫打板					

第21図 堀の内遺跡出土遺物（2）

## 第4章 総括

1. 本書では、平成25年度に実施した埋蔵文化財保存協議の概要と、これに伴って実施した発掘調査のうち、下記の調査について報告した。

(1) 小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（1遺跡1件）

(2) 各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（2遺跡2件）

2. 緊急発掘調査では、下記のことが明らかになった。

(1) 愛宕山遺跡

①参道改良工事計画地内で竪穴住居跡1軒を確認した。床面に炉跡と見られる焼面がある。遺物は土師器などが出土し、古墳時代前期のものと考えられる。

②古墳時代前期に集落が営まれていたことが判明した。その性格については平地との比高差が90m以上の高所立地という点で特異

であり、本遺跡と連続する尾根上に分布する複数の古墳との関連も考えられる。

③遺構外から古墳時代中期・後期～奈良時代の遺物が出土した。

3. 遺構確認調査では、下記のことが明らかになった。

(1) 堀の内遺跡

個人住宅建築計画地内で竪穴住居跡4軒、溝跡2条、土坑8基、柱穴16か所を確認した。遺物は土師器、須恵器が出土した。土師器は古墳時代前期のものがある。

(2) 渕坂山B遺跡

木工所建築計画地内で土坑・柱穴22基の分布を確認した。遺物は縄文土器、敲石、剥片が出土した。縄文土器は縄文時代中期後半の大木9式のものがある。

## 引用・参考文献

- 伊東信雄 1955 「各地域の弥生式土器－東北－」『日本考古学講座4』杉原莊介編 河出書房
- 氏家和典 1957 「東北土器類の型式分類とその編年」歴史 14 東北大學史学会
- 氏家和典 1967 「陸奥國分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『山形県の考古と歴史 柏倉亮吉教授還暦記念論文集』山形史学会
- 風間觀靜 1983 『仙台藩の街道』『宮城の研究5 近世編III』渡辺信夫編 清文堂
- 刈田郡教育会 1928 『刈田郡誌』宮城県刈田郡教育会編
- 蔵王町史編纂委員会 1987 『蔵王町史 資料編I』
- 蔵王町史編纂委員会 1989 『蔵王町史 資料編II』
- 蔵王町史編纂委員会 1993 『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994 『蔵王町史 通史編』
- 佐藤伝蔵 1904 「日本石器時代地名表」東京人類学雑誌 第5版 223
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」研究紀要 VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 2003 「市川横道跡～城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」多賀城市文化財調査報告書 70
- 林謙作 1962 「東北地方早期繩文文化の展開」考古学研究 9-2 考古学研究会
- 藤沢敦 2000 「阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 1981 「東山遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書V 宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1990 「鍛冶沢遺跡」「大貫館山遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書 137
- 宮城県教育委員会 1992 「諫訪越前遺跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書 146
- 宮城県教育委員会 2003 「十郎田遺跡ほか」「境の越遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2010 「鍛冶沢遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書 222
- 宮城県教育委員会 2011 「観音堂山遺跡」宮城県文化財調査報告書 227
- 蔵王町文化財調査報告書**
- 蔵王町文化財調査報告書 1 (1990) 『堀ノ内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 2 (1997) 『堀の内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 3 (2002) 『諫訪館前遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 4 (2005) 『都遺跡ほか（都遺跡・荏田遺跡・新城館跡）』
- 蔵王町文化財調査報告書 5 (2006) 『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
- 蔵王町文化財調査報告書 6 (2007) 『中沢A遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 7 (2008) 『六角遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 8 (2009) 『戸ノ内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 9 (2009) 『青竹遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 10 (2011) 『西浦B遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 11 (2011) 『対田遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 12 (2011) 『小原遺跡－特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 13 (2011) 『十郎田遺跡1－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 14 (2011) 『十郎田遺跡2－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- SE66 井戸跡出土木製造物編 附 十郎田遺跡出土木製造物に関する自然科学的分析
- 蔵王町文化財調査報告書 15 (2012) 『西屋敷遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 16 (2013) 『前戸内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 17 (2014) 『磯ヶ坂遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
- 蔵王町文化財調査報告書 18 (2014) 『蔵王町内遺跡発掘調査報告書1  
—各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査(平成18～24年度)－』
- 蔵王町文化財調査報告書 19 (2014) 『円田盆地の遺跡群1  
—経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）に伴う緊急発掘調査<総括編>－』



## 附編

附編1 谷地遺跡発掘調査概報（平成23・24年度調査）

附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）



手前：谷地遺跡11区・S11住居跡検出状況（南から）



## 附編 1 谷地遺跡発掘調査概報（平成 23・24 年度調査）

### 1. 遺跡の概要

谷地遺跡は、藏王町東部の松川北岸に形成された低位の矢附段丘上に立地する。縄文時代の散布地として登録されており、北側に隣接する寺門前遺跡西部まで広がる一連の遺構分布が推定される。遺跡の現況は主に果樹園・畑地・宅地で、これまでに発掘調査は行なわれていない。周辺には、鞘堂山遺跡（中期中葉）、湯坂山 B 遺跡（中期後葉）、西浦 B 遺跡（後期前葉）など縄文時代中期～後期の集落跡が多数分布する。

### 2. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、白石消防署蔵王出張所庁舎の移転計画に伴うものである。平成 23 年 1 月 12 日に白石消防署蔵王出張所建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が蔵王町より町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。県教育委員会では 1 月 31 日に現地踏査を行ない、遺構確認調査を実施する必要があるとの回答書が 2 月 16 日に交付された。これを受けて町教育委員会が 2 月 22 日～3 月 1 日にかけて遺構確認調査を実施したところ、計画範囲の全域で濃密な遺構分布が確認された。確認した遺構は住居跡・貯蔵穴・土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・遺物包含層などとみられ、縄文時代前期～中期前半の縄文土器・石器などが多数出土した（町 18 集）。このことから、計画範囲は縄文時代中期前半の拠点的集落跡の中心部分の一角と推定された。この結果を受けて県・町教育委員会と事業主の蔵王町で対応を協議した結果、遺跡の重要性は高いものの、事業の必要性は高く用地の変更も難しいことから、事前調査を実施して記録保存を図ることで合意した。なお、用地のうち職員駐車場部分約 500m<sup>2</sup> では工事による遺構への影響が生じないことから保存区とし、事前調査範囲から除外した。発掘調査は平成 23 年 7 月 14 日に着手し、翌年 8 月 24 日までの約 1 年間を要した。調査要項は下記の通りである。

#### <調査要項>

遺跡名：谷地遺跡（記号：Y T、番号：05021）

調査原因：消防庁舎建設用地造成計画

調査箇所：蔵王町大字円田字谷地 76-2

調査期間：平成 23 年 7 月 14 日～平成 24 年 8 月 24 日

調査面積：1,590m<sup>2</sup>



第 22 図 調査地点位置図



写真 29 調査前現況（北東から）



写真 30 調査風景（北東から）

調査主体：蔵王町教育委員会

調査員：佐藤洋一・鈴木雅・庄子善昭・渡邊香織・

　　我妻なおみ・鈴木和美・海藤元

調査指導：宮城県教育委員会

調査協力：仙南地域広域行政事務組合・蔵王町総務課・

　　蔵王町建設課・曾根田政子

### 3. 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後の平成24年9月に着手した。出土した遺物量が膨大であることから、現状の文化財整理室の規模に合わせて立案した年次計画に沿って作業を進めている。平成25年度までに遺物の洗浄・注記作業と調査記録類の整理を実施し、平成26年度は土器の接合・修復作業と石器類の注記作業を進めながら、専門業者への委託業務により遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS分析）、遺構出土焼骨の動物種同定などを実施している。また、株式会社加速器分析研究所との共同研究としてSI20住居跡出土焼骨・炭化物の放射性炭素年代測定（AMS分析）を行なった（附編2）。平成27年度以降は遺物の修復・実測・トレース作業を主体としながら各種自然科学分析等を実施していく計画である。正式な報告書の刊行までにはさらに数か年度を要する見込みであることから、現時点で把握されている事実関係を中心に概要を報告し、調査成果の早期公開を図ることとしたい。

### 4. 調査の成果

#### (1) 基本層序と遺構・遺物の確認状況

本遺跡周辺の現地形は西から東へ向かって緩やかに傾斜しており、調査区内でもほぼ同様の旧地形が確認された。調査区内の基本層序は第3表のとおりで、II・III層は遺物を多く含む。II層は火山灰とみられる青灰色のシルト～砂をまだら状に含む。遺物を直接覆う状況も見られた。遺構はII～III層上面、およびIV～VI層の削平面で確認した。遺構どうしの重複が著しく基本層との関係を確認できたものは少ないが、大半はII・III層上面からの掘り込みと考えられる。

遺構は調査区内全域に極めて濃密に分布する。住居跡14軒、貯蔵穴55基、土器埋設遺構12基、配石遺構1基、多数の土坑・柱穴などのほか、これらと重複しながら面的な広がりを持って分布する遺物包含層を確認した。遺構はII層に覆われるものと、II層を掘り込んで形成されるものがある。II層は遺物をあまり含まない火山灰層と考えられるもので、火山灰の降下あるいは再堆積を作りイベントを挟んで集落が機能したことと示すと考えられる。

遺物の出土量は膨大である。各遺構と遺物包含層を中心に縄文土器・土製品類約500箱、剥片石器類約50箱、礫石器類約100箱分などが出土し、総量にして約650箱（整理箱44×60×15cm換算、未整理）、推計重量約10tに及ぶ。

層序	層名	土性
I層	表土・耕作土層	黒褐色シルト
II層	青灰色火山灰層	暗褐色砂質シルト
III層	旧表土層	黒褐色シルト
IV層	上部漸移層	暗褐色粘質シルト
V層	下部漸移層	黄褐色粘質シルト
VI層	ローム層	褐色シルト
VII層	川崎スコリア層	暗オリーブ灰色シルト
VIII層	砂質ローム層	にぶい黄褐色砂質シルト
IX層	砂質ローム層	黄褐色砂質シルト
X層	砂礫層	灰黃褐色砂礫

第3表 基本層序 ■遺構確認面



写真31 基本層序断面（調査区西部・南から）



写真32 基本層序断面（調査区中央部・東から）



写真33 基本層序断面（調査区北西部・西から）

## (2) 遺構の特徴と分布状況

住居跡は平面形が円形を基調とするもの 7 軒、長楕円形を呈するもの 7 軒を確認した。円形住居には直径 6.5 ~ 8.8m の竪穴住居跡 3 軒 (SI1・20・22) と、平地住居と見られる直径 4.9 ~ 10.7m の環状建物跡 4 軒 (SI360・364・366・740) がある。竪穴住居跡は最大 64cm の掘り込みを伴い、床面の中央部に地床炉を持つ。SI1・22 住居跡では 4 本一組とみられる明瞭な主柱穴、SI20 住居跡では重複が著しく組み合わせが不明な多数の柱穴を確認した。長楕円形住居はいずれも平地住居と見られるもので、幅 2.7 ~ 4.0m、長軸 5.0 ~ 15.1m の長方形建物跡 (SI611)、亀甲形建物跡 (SI167・358・360・362・363・741) がある。一部に壁面の立ち上がりが不明瞭な掘り込みを伴い、床面の中軸線上に複数の地床炉を持つ。

長楕円形住居は長軸が東西方向を主体とし、調査区東寄りに並列するように分布する。円形住居はこれよりやや標高の高い調査区中央寄りを中心に分布し、このうち竪穴住居 3 軒は 10m 前後の間隔で点在する。

貯蔵穴はいずれも坑口が狭く坑底が広いフラスコ状を呈する。深さ 30 ~ 180cm 程度で、坑底部の平面形が直径 106 ~ 244cm 程度の円形を基調とする。調査区東部に多く分布し、複数基の重複が認められる。

土器埋設遺構は深鉢形土器を正位・逆位に埋設する。土器以外の遺物が確認されたものはない。

配石遺構は浅い土坑の底面に 50cm 大の河原石 5 点を列状に配置する。土坑は配石の周囲に重複して繰り返し掘られた形跡が見られる。土坑内にまとまった遺物の出土状況は見られなかった。

遺物包含層は旧地形の窪地状部分や、ある程度埋没が進んだ住居跡などを覆うように形成されている。

なお、1・2 区南端部～3 区西部の範囲は削平による影響で遺物包含層や掘削深度の浅い遺構が消失している可能性があり、必ずしも空白域とは言えない。

## (3) 主な遺構

**【SI1 住居跡】** 平面形は長軸 6.5m、短軸 6.2m の略円形を呈し、北壁に幅 1.9m、奥行 0.7m の張り出し部を持つ。残存壁高は最大 11cm で、南側は削平により壁面が残存しない。床面はほぼ平坦で中央部が硬化している。床面の中央で地床が 1 か所を確認した。柱穴は 9 か所確認し、このうち規模が大きく住居平面形の長軸・短軸方向で対向する 4 か所が主柱穴、これ以外の 5 か所は副柱穴と考えられる。床面に近い堆積土中などで、30 個体以上の土器が出土した。



写真 34 調査区全景（北から）



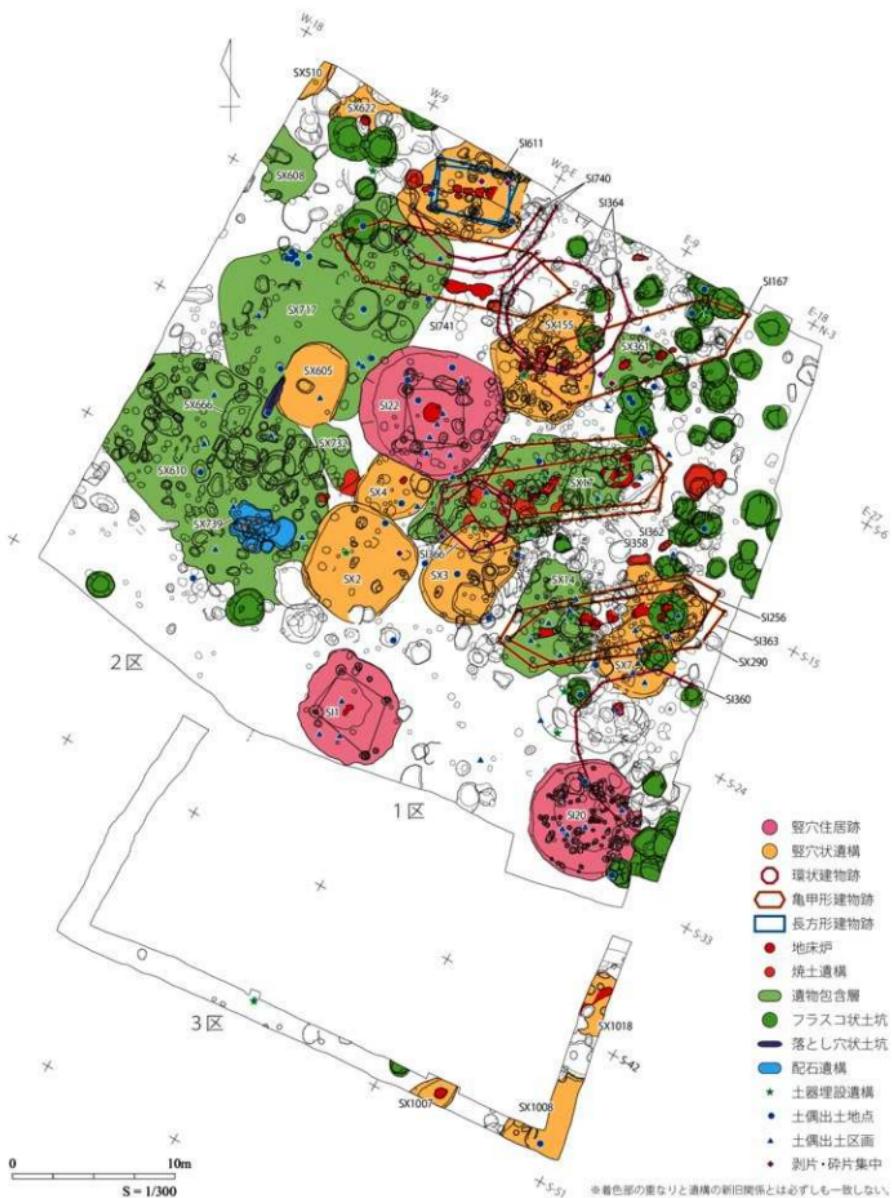
写真 35 調査区全景（南東から）



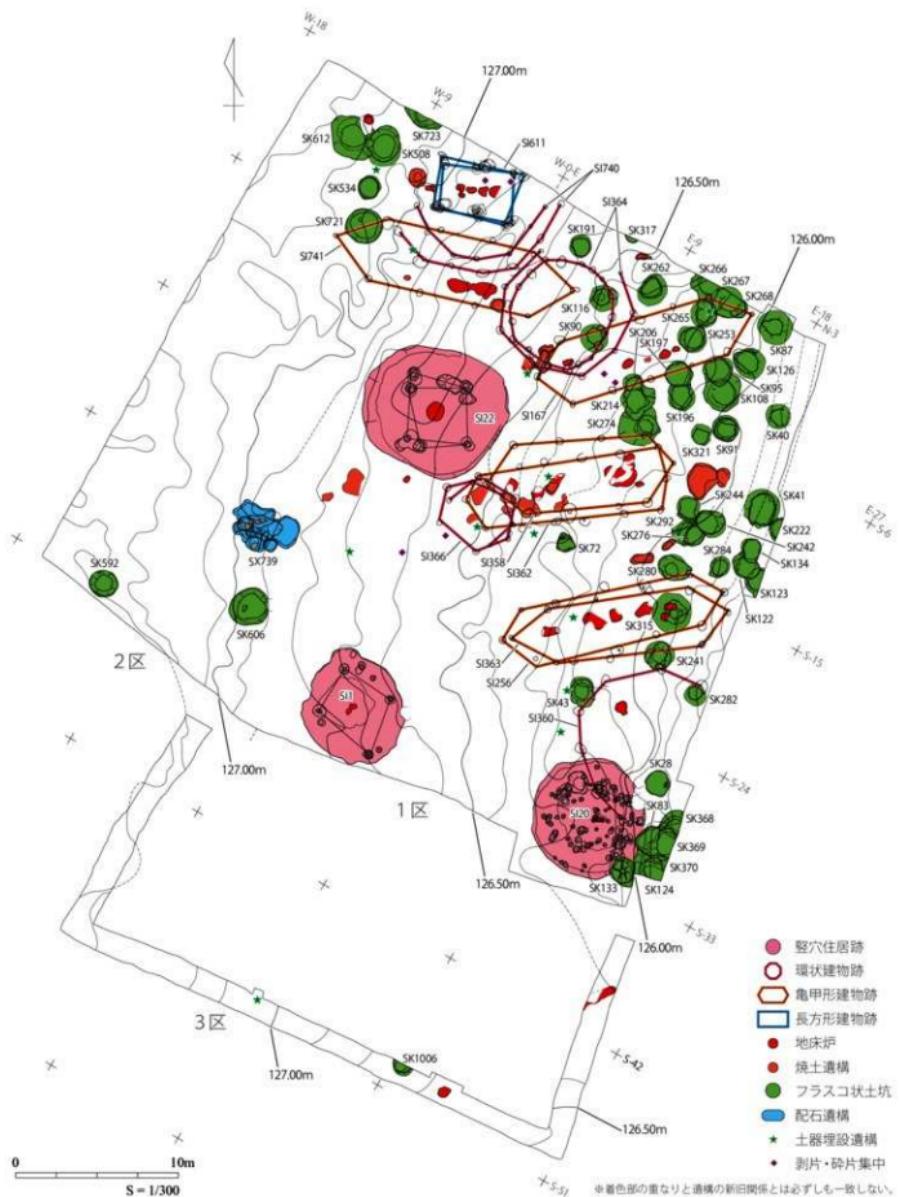
写真 36 作業全景（西から）



写真 37 作業全景（北東から）



第23図 遺構配置図



第24図 調査区内の地形と住居跡・貯蔵穴などの分布

**【SI20 住居跡】** 平面形は長軸7.3m、短軸7.0mの略円形を呈し、残存壁高は最大43cmである。床面はほぼ平坦で、中央部が硬化している。床面の中央で地床炉1か所を確認した。炉跡の周囲では床面の硬化が確認された。住居北壁付近で床面から掘り込まれた貯蔵穴1基を確認した。深さ58cmのフラスコ状を呈し、坑底部の平面形は長軸1.3m、短軸1.1mの不整梢円形を呈する。柱穴はごく小さいものも含めて約70か所を確認した。重複が著しく主柱穴の配置や柱穴どうしの組み合わせは不明である。床面に近い堆積土中などで、10個体以上の土器が出土した。

**【SI22 住居跡】** 平面形は長軸8.8m、短軸7.5mの不整円形を呈し、残存壁高は最大64cmである。床面はほぼ平坦で、中央部が硬化している。床面の中央で浅い皿状に窪む地床炉1か所を確認した。主柱穴は4か所を確認し、このうち西側の2か所は時計回り方向に隣接して掘り直されていると考えられる。床面直上で大型土偶の破片が出土した。

**【SI611 住居跡】** 長軸5.0m、短軸2.7mの長方形に配置された6か所の柱穴からなる。柱穴は2・3時期の変遷がある。平面形と壁面の立ち上がりが不明瞭な深さ最大35cmの掘り込み面を床とする。床面中央の長軸方向に連なる地床炉6か所を確認した。

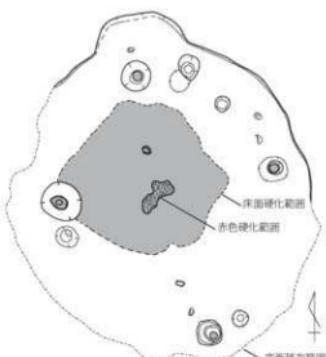
**【SK606 貯蔵穴】** 深さ126cmのフラスコ状を呈し、坑底部の平面形は長軸250cm、短軸225cmの略円形を呈する。底面の中央やや西寄りで斜めに掘り込まれたピット1か所を確認した。底面に近い堆積土中で、5個体の土器が出土した。

**【SX2 穴状遺構】** 平面形が長軸6.7m、短軸6.4mの梢円形を呈し、深さ33cmの掘り込みである。底面はほぼ平坦で、壁面が比較的明瞭に立ち上がる。この掘り込みに伴う柱穴や炉跡は確認されなかった。

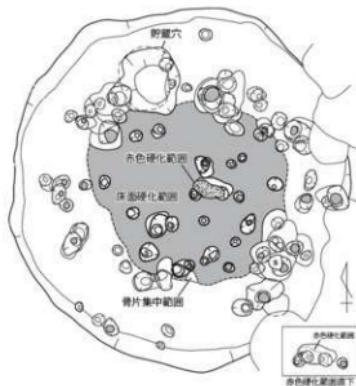
**【SX4 穴状遺構】** 平面形が長軸4.1m以上、短軸4.1mの梢円形を呈し、深さ46cmの掘り込みである。底面はほぼ平坦で、壁面が比較的明瞭に立ち上がる。中央部に床面の硬化が見られ、地床炉1か所を確認した。これらに伴う柱穴は確認されなかった。

**【SX605 壁穴状遺構】** 平面形が長軸5.1m、短軸3.8mの梢円形を呈し、深さ39cmの皿状の掘り込みである。底面はほぼ平坦で、10個体以上の土器が出土した。この掘り込みに伴う柱穴や炉跡は確認されなかった。

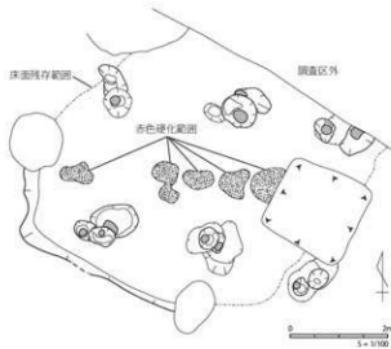
**【SK133 貯蔵穴】** 深さ120cmのフラスコ状を呈し、坑底部の平面形は長軸157cm、短軸155cmの不整円形を呈する。底面の中央で浅い皿状のピット1か所と、放射状にのびる細溝6条を確認した。堆積土中層で、



第25図 SI1 住居跡



第26図 SI20 住居跡



第27図 SI611 住居跡

焼成不良な土器 1 個体分の破片が出土した。

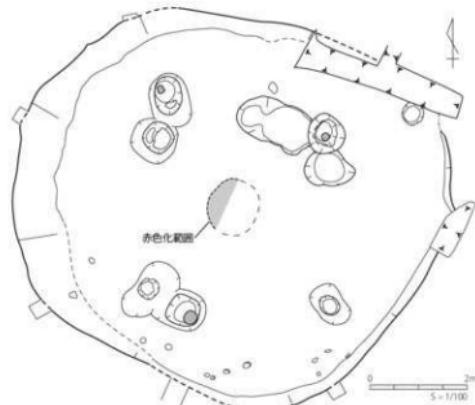
【SK723 貯蔵穴】深さ 162cm のフラスコ状を呈し、坑底部の平面形は長軸 205cm の略円形を呈するとみられる。上部が崩落しているが、機能時の壁面の形状がほぼ保たれた状態で確認した。堆積土下層で炭化物層を確認した。

【SX739 配石遺構】平面形が長軸 2.6m、短軸 1.6m の不整梢円形を呈し、断面形が深さ 23cm の不整逆台形を呈する土坑の底面の南壁に沿って石材が配列されている。土坑内からは土器片がやまとまつて出土した。配石は、長軸 40-50cm、厚さ 20cm 前後の安山岩・花崗岩の河床礫を用いて、線状に立て並べている。配石の下では土坑 2 基を確認したが、遺物は少量の

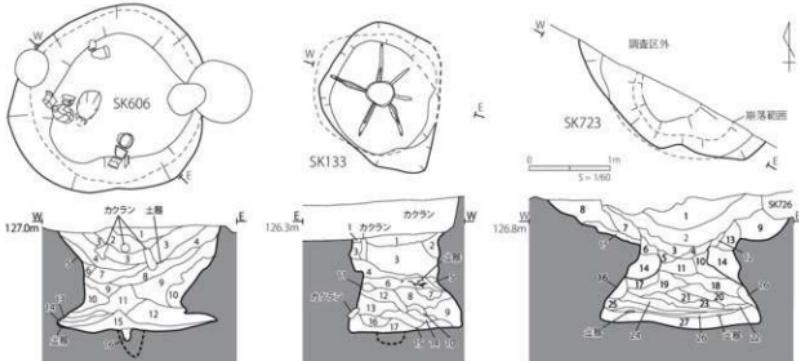
土器片が出土したのみである。また、東側 (SK661)・南側 (SK649) に隣接する土坑の上面にそれぞれ長軸 40 ~ 50cm、厚さ 20cm 前後の安山岩の河原石 1 点ずつが配置されており、関連が考えられる。

【SX17 遺物包含層】東西約 15m、南北約 7m の範囲で、SI358・SI362 住居跡を覆うように分布する。基本層 II 層の直下で確認した。層厚は最大 30cm 程度で、底面は東へ向かって緩やかに傾斜する。堆積土に焼骨片を多く含み、縄文土器、礫石器などが多く出土した。

【SX717 遺物包含層】東西約 12m、南北約 15m の範囲に分布する。基本層 II 層の上面に形成されている。層厚は最大 30cm 程度で、底面は東へ向かって緩やかに傾斜する。縄文土器、礫石器などが多く出土した。



第 28 図 SI22 住居跡



第 29 図 SK133・606・723 貯蔵穴

#### (4) 主な遺物

各遺構や遺物包含層などから縄文土器・剥片石器・礫石器・土偶・土製品・石製品などが出土している。遺構の機能時に伴うと判断されるものには住居床面あるいは貯蔵穴底面出土土器などがあるが、あまり多くない。遺物の多くは住居・貯蔵穴などの廃絶後に形成された堆積層や遺物包含層から出土している。これらの中には、同一面上に個体の形状を留めた状態の土器がまとまって出土し、礫石器などとともに一括廃棄されたとみられる状況の遺物群が複数見られる。剥片石器も多く出土しているが、剥片・チップ類の集中地点は数か所で小規模なものを確認したのみであり、調査区内での製作痕跡は希薄である。このほか、土偶・土製品・石製品類は遺物包含層を中心に調査区内の広範囲から出土している。

縄文土器は縄文時代中期前半の大木6・7a・7b・8a式がある。大部分を大木7b式が占め、大木8a式がこれに次ぐ。関東地方の五頭ヶ台式・阿玉台式、北

陸地方の新保・新崎式など異系統土器の共伴あるいは文様要素の受容も見られるようである。

剥片石器は山形県最上川流域からの搬入と考えられる珪質頁岩を主石材とする。製品あるいは使用痕跡のある剥片が主体的であり、石核は少ない。母岩別資料として把握されるものは在地石材の一部に限られ、剥片剥離作業の痕跡はあまり多くない。磨製石斧は緑色片岩製のものなどがあり、製品あるいは破損品である。礫石器は安山岩・花崗岩製のものを中心に多量に出土し、20kgを超える大型の礫も搬入されている。

土製品はミニチュア土器、土偶、三角形土製品、環状土製品などがある。土偶は各部の破片が約140点出土している。完形品は皆無であり、同一個体と判断される破片も少ない。山形県西ノ前遺跡出土土偶などに類似する長身の立像土偶が主体で、高さ10cm弱の小型品、20cm程度の中型品、40cmを超えると推定される大型品が見られる。石製品は硬玉製の垂飾品、安山岩製の石棒などが出土している。

#### 5.まとめ

(1)谷地遺跡は藏王町東部に位置し、阿武隈川水系白石川支流の松川北岸に形成された標高約127mの矢附段丘面上に立地する。

(2)縄文時代中期前半の住居跡14軒、貯蔵穴55基、土器埋設遺構12基、配石遺構1基、多数の土坑・柱穴などのほか、自然地形の窪地状部分や廃絶後の住居跡などに遺物包含層が形成されており、土器・礫石器などが一括廃棄を示す状況で出土していることから捨て場遺構と考えられる。

(3)遺物は縄文土器・剥片石器・礫石器・土偶・土製品・石製品などが多量に出土し、整理箱で約650箱、推計重量10tに及ぶ。縄文土器は大木7b・8a式が主体で、関東・北陸地方との関連を窺わせる異系統土器の共伴も見られる。ミニチュア土器、

土偶、三角形土製品など祭祀に関連するとみられる遺物も豊富である。剥片石器・礫石器は製品や破損品が主体的である。

(4)今回の調査地点は縄文時代中期前半の比較的大規模な集落跡の中心部をなす一角と考えられる。確認した遺構群からは当時の集落構造の一端が窺われるとともに、これらに伴う豊富な遺物群は当時の生活および祭祀的行為の解明に繋がる多様な情報を内包しているものと予想される。

(5)SL20住居跡出土の焼骨・炭化物を試料とした放射性炭素年代測定(AMS分析)では、<sup>14</sup>C年代で4,440 ± 30yrBP ~ 4,370 ± 30yrBPの値が示された(附編2)。本遺跡の年代の一端を示すとともに、測定試料として焼骨の有効性を示す事例としても重要と考えられる。



1. SI1 住居跡検出状況（南から）



2. SI1 住居跡床面検出状況（東から）



3. SI1 住居跡完掘状況（北から）



4. SI1 住居跡床面遺物出土状況（北から）



5. SI1 住居跡床面遺物出土状況（西から）



6. SI20 住居跡堆積土確認状況（西から）



7. SI20 住居跡床面検出状況（南から）



8. SI20 住居跡完掘状況（南から）

写真図版 1 住居跡の調査（1）



1. SI20 住居跡貯藏穴（東から）



2. SI20 住居跡床面骨片集中範囲（北から）



3. SI20 住居跡床面遺物出土状況（東から）



4. SI20 住居跡床面遺物出土状況（東から）



5. SI20 住居跡遺物出土状況（北から）



6. SI20 住居跡遺物出土状況（大型土偶脚部、東から）



7. SI22 住居跡床面検出状況（西から）



8. SI22 住居跡遺物出土状況（大型土偶脚部、西から）

写真図版2 住居跡の調査（2）



1. SI611 住居跡床面検出状況（北東から）



2. SI256 住居跡床面検出状況（北東から）



3. SI1007 住居跡床面遺物出土状況（北から）



4. SK723 フラスコ状土坑断面（南から）



5. SK606 フラスコ状土坑作業風景（南から）



6. SK606 フラスコ状土坑遺物出土状況（東から）



7. SK133 フラスコ状土坑完掘状況（北東から）



8. SK28 フラスコ状土坑遺物出土状況（北から）

## 写真図版 3 住居跡・貯蔵穴の調査



1. SX171 土坑遺物出土状況（西から）



2. SX17 遺物包含層遺物出土状況（西から）



3. SX605 壁穴状遺構遺物出土状況（東から）



4. SX605 壁穴状遺構遺物出土状況（東から）



5. SX719 土器埋設遺構（南から）



6. SX719 土器埋設遺構断面（東から）



7. SX739 配石遺構（北から）



8. SX739 配石遺構（東から）

写真図版4 土坑・遺物包含層・土器埋設遺構・配石遺構の調査



1. SI1 住居跡 (H=51.2cm)



2. SI1 住居跡 (H=35.9cm)



3. SI1 住居跡 (H=33.1cm)



4. SI1 住居跡 (H=29.5cm)



5. SI20 住居跡 (H=28.0cm)



6. SI20 住居跡 (H=20.5cm)



7. SI22 住居跡 (H=16.1cm)



8. SK40 フラスコ状土坑 (H=20.5cm)



9. SK43 フラスコ状土坑 (H=21.9cm)

写真図版5 主な出土遺物 繩文土器 (1)



1. SK90 フラスコ状土坑 (H=32.4cm)



2. SK116 フラスコ状土坑 (H=20.9cm)



3. SK280 フラスコ状土坑 (H=37.3cm)



4. SK606 フラスコ状土坑 (H=27.1cm)



5. SK721 フラスコ状土坑 (H=12.2cm)



6. SK721 フラスコ状土坑 (H=18.0cm)



7. SX4 穴穴状遺構 (H=12.1cm)



8. SX4 穴穴状遺構 (H=24.7cm)



9. SX17 遺物包含層 (H=29.0cm)

写真図版6 主な出土遺物 壷文土器 (2)



1. SX17 遺物包含層 (H=43.9cm)



2. SX17 遺物包含層 (H=41.2cm)



3. SX608 遺物包含層 (H=57.1cm)



4. SX717 遺物包含層 (H=30.0cm)



5. SX717 遺物包含層 (H=36.5cm)



6. SX717 遺物包含層 (H=24.7cm + 15.2cm)



7. SX717 遺物包含層 (H=37.8cm)



8. SX717 遺物包含層 (H=31.3cm)



9. SX732 遺物集中範囲 (H=32.1cm)

写真図版 7 主な出土遺物 繩文土器 (3)



1. SX719 土器埋設遺構 (H=35.0cm)



2. SX719 土器埋設遺構 (H=34.4cm)



3. 遺構確認面 (H=47.1cm)



4. SI1 住居跡 (H=14.7cm)



5. SI1 住居跡 (H=15.5cm)



6. SI20 住居跡 (H=13.7cm)



7. SI20 住居跡 (H=20.7cm)



8. SI20 住居跡 (H=15.3cm)



9. SI22 住居跡 (H=16.5cm)



10. SK116 フラスコ状土坑 (H=11.6cm)



11. SX288 土器埋設遺構 (H=18.3cm)



12. SX717 遺物包含層 (H=14.2cm)



13. SX717 遺物包含層 (H=27.3cm)



14. SX717 遺物包含層 (H=18.6cm)



15. 遺構確認面 (H=18.0cm)

写真図版8 主な出土遺物 繡文土器 (4)



1. SK664 土坑 (H=5.9cm)



2. SX732 遺物集中範囲 (H=5.6cm)



3. SX717 遺物包含層 (H=7.1cm)



4. SK116 フラスコ状土坑 (H=8.4cm)



5. SX610 遺物包含層 (H=7.2cm)



6. SK28 フラスコ状土坑 (H=5.4cm)



7. SK328 土坑 (H=3.2cm)



8. SX17 遺物包含層 (H=4.1cm)



9. SK534 フラスコ状土坑 (W=7.3cm)



10. SK612 フラスコ状土坑 (W=7.4cm)



11. SK612 フラスコ状土坑 (W=4.3cm)



12. SK123 フラスコ状土坑 (W=5.4cm)



13. SX717 遺物包含層 (L=3.4cm)



14. 基本層Ⅲ層 (L=2.3cm)



15. 基本層Ⅲ層 (W=4.3cm)



16. 遺構確認面 (W=3.1cm)



17. SI22 住居跡 (L=4.9cm)

写真図版9 主な出土遺物 繩文土器 (5)・土製品



1. SK35 土坑 (H=6.9cm)



2. 遺構確認面 (H=4.7cm)



3. SX610 遺物包含層 (H=6.1cm)



4. SX605 竪穴状遺構 (H=14.2cm)



5. 遺構確認面 (H=5.5cm)



6. 遺構確認面 (H=10.1cm)



7. SX7 竪穴状遺構 (H=9.1cm)



8. 捣乱層 (H=9.2cm)



9. SX14 遺物包含層 (H=10.5cm)



10. SX610 遺物包含層 (H=10.0cm)



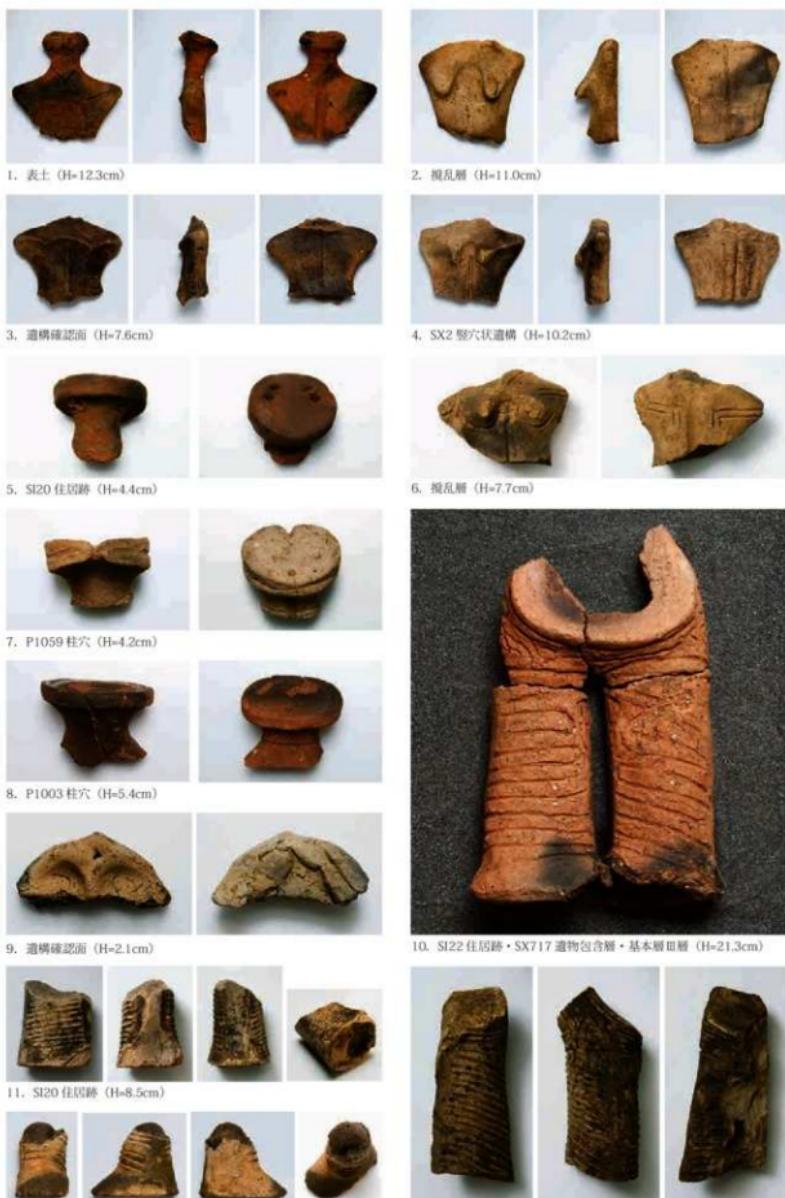
11. 捣乱層 (H=8.2cm)



12. 遺構確認面 (H=4.5cm)



写真図版 10 主な出土遺物 土偶 (1)



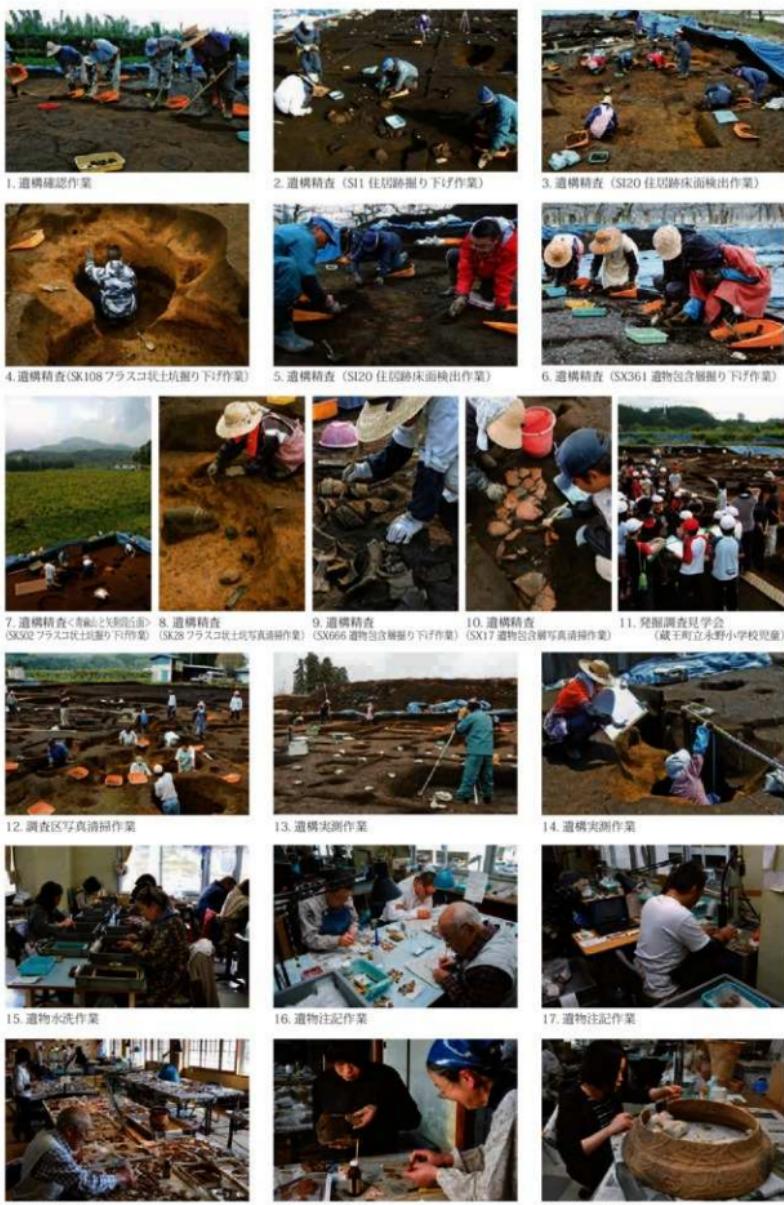
写真図版 11 主な出土遺物 土偶 (2)



1. 石器・石匙・石鏟・石槍・石錐・打製石斧・磨製石斧（右上隅の打製石斧：H=20.6cm）



写真図版12 主な出土遺物 石器・石製品



写真図版 13 発掘調査・室内整理作業スナップ



## 附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所 藏王町教育委員会

### 1. はじめに

谷地遺跡は、宮城県刈田郡藏王町大字円田字谷地に所在し、阿武隈川水系白石川支流の松川左岸に形成された矢附段丘面上に立地する。平成23・24年度に実施した発掘調査では、住居跡・貯蔵穴・遺物包含層などの遺構から大木7b・8a式を主体とする繩文土器、土製品、石器、石製品など多量の遺物が出土した。これらの遺構・遺物の内容から、本遺跡は縄文時代中期前半の拠点的な集落跡と考えられる。

このうち20号住居跡では、床面直上を覆う堆積土3層から焼骨・炭化材が出土している。株式会社加速器分析研究所と藏王町教育委員会は、これらを試料とした放射性炭素年代測定を共同研究として実施した。研究の目的は、①土器型式から大木8a式期と推定される遺構の年代を推定すること。②国内では分析事例の少ない焼骨を用いた年代測定の有効性を検証することである。分析は平成26年5月に実施した。

本稿の執筆は、Iを鈴木雅（藏王町教育委員会）、2～6を早瀬亮介（加速器分析研究所）が担当した。

### 2. 測定対象試料

測定対象試料は、20号住居跡3層から出土した焼骨と炭化材の合計6点である（表1）。焼骨No.1～3の写真を写真38に示した。No.1はニホンジカ角1片、No.2はニホンジカ角3片、No.3はニホンジカまたはニホンイノシシ下顎骨下端部（写真右端）を含む2片（写真では割れて破片数が多くなっている）を試料とした。これらの試料が出土した遺構は大木8a式期と考えられている。



No.1

No.2

No.3

写真38 測定試料（焼骨）

### 3. 化学処理工程

#### （1）炭化材の化学処理

1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

2) 酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。

4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### （2）焼骨の化学処理

焼骨の<sup>14</sup>C年代測定を検討したLanting et al. 2001、Naysmith et al. 2007を参考に、以下の処理を行った。

1) ブラシ等を使い、試料から根・土等の付着物を取り除く。さらに超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

2) 1.5%の次亜塩素酸ナトリウム(NaClO)で2日間、1Mの酢酸(CH<sub>3</sub>COOH)で1日間処理を行う。

3) 試料をリン酸と反応させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を

発生させる。  
以下、(1)～(4) 以降と同じ。

#### 4. 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置(NEC 社製)を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO<sub>2</sub> II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5. 算出方法

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半滅期(5568年)を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{13}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{13}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下1桁を

丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するため「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

#### 6. 測定結果と若干の考察

##### (1) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。  
試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、焼骨が 4440  $\pm$  30yrBP (No.2) から 4410  $\pm$  30yrBP (No.3)、炭化材が 4410  $\pm$  30yrBP (No.6) から 4370  $\pm$  30yrBP (No.5) の間にある。各々誤差( $\pm 1\sigma$ )の範囲で一致する狭い範囲に収まっている、双方の間でも重なる範囲が見られる。

历年較正年代( $1\sigma$ )は、6点の中で最も古い焼骨 No.2 が 5260  $\sim$  4971cal BP、最も新しい炭化材 No.5 が 4960  $\sim$  4874cal BP の間に各々複数の範囲で示される。焼骨と炭化材の历年年代範囲は重なっているが、若干焼骨の方が古い傾向も認められる。谷地遺跡が所在する東北地方南部の測定例を検討すると、今回測定された6点の年代値は縄文時代中期中葉大木8a式期の事例におおむね一致する。ただし、中期前葉大木7b式期の事例が乏しいため、不明な部分もある(早瀬 2010)。他地域の検討成果も踏まえて対比すると、中期前葉から中葉頃に相当すると見られる(小林編 2008)。試料が出土した遺構は大木8a式期と考えられており、調査所見におおむね整合する結果である。

試料の炭素含有率を確認すると、焼骨では No.1 が 0.1%、No.2 が 0.2%、No.3 が 0.3% で、Lanting らによる約 0.1% という実験結果におおむね近い (Lanting et al. 2001)。炭化材はいずれも 60% を超える十分な値であった。

##### (2) 焼骨の $^{14}\text{C}$ 年代測定に関する問題の整理

骨の  $^{14}\text{C}$  年代測定は、骨中に含まれるコラーゲンを

第4表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-131645	No.1	SI20 (20号住居) 3層	焼骨		-29.54 ± 0.59	4,420 ± 30	57.66 ± 0.20
IAAA-131646	No.2	SI20 (20号住居) 3層	焼骨		-27.11 ± 0.53	4,440 ± 30	57.52 ± 0.20
IAAA-131647	No.3	SI20 (20号住居) 3層	焼骨		-18.96 ± 0.84	4,410 ± 30	57.78 ± 0.21
IAAA-131648	No.4	SI20 (20号住居) 3層	炭化材	AAA	-24.92 ± 0.18	4,390 ± 30	57.90 ± 0.19
IAAA-131649	No.5	SI20 (20号住居) 3層	炭化材	AAA	-22.57 ± 0.18	4,370 ± 30	58.04 ± 0.18
IAAA-131650	No.6	SI20 (20号住居) 3層	炭化材	AAA	-24.47 ± 0.22	4,410 ± 30	57.75 ± 0.19

[#6102]

第5表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正値、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131645	4,500 ± 30	57.13 ± 0.18	4,422 ± 27	5211calBP - 5202calBP (3.5%) 5048calBP - 4960calBP (61.8%) 4926calBP - 4920calBP (1.8%) 4897calBP - 4894calBP (1.1%)	5265calBP - 5242calBP (2.2%) 5237calBP - 5222calBP (1.5%) 5215calBP - 5186calBP (7.1%) 5117calBP - 5114calBP (0.2%) 5061calBP - 4872calBP (84.4%)
IAAA-131646	4,480 ± 30	57.27 ± 0.19	4,442 ± 28	5260calBP - 5244calBP (4.9%) 5235calBP - 5224calBP (3.3%) 5214calBP - 5188calBP (13.0%) 5056calBP - 4971calBP (47.0%)	5280calBP - 5164calBP (33.4%) 5235calBP - 5105calBP (4.6%) 5134calBP - 4958calBP (53.2%) 5076calBP - 4958calBP (53.2%) 4932calBP - 4885calBP (4.2%)
IAAA-131647	4,310 ± 30	58.49 ± 0.18	4,406 ± 28	5038calBP - 4995calBP (28.3%) 4986calBP - 4959calBP (17.1%) 4930calBP - 4888calBP (22.9%)	5212calBP - 5201calBP (1.7%) 5049calBP - 4869calBP (93.7%)
IAAA-131648	4,390 ± 30	57.91 ± 0.18	4,389 ± 25	5028calBP - 5020calBP (4.9%) 4973calBP - 4950calBP (16.6%) 4942calBP - 4878calBP (46.7%)	5039calBP - 4995calBP (18.3%) 4985calBP - 4868calBP (77.1%)
IAAA-131649	4,330 ± 30	58.33 ± 0.18	4,371 ± 25	4960calBP - 4927calBP (29.2%) 4920calBP - 4874calBP (39.0%)	5034calBP - 5013calBP (6.5%) 4978calBP - 4860calBP (88.9%)
IAAA-131650	4,400 ± 30	57.81 ± 0.18	4,410 ± 25	5041calBP - 4960calBP (58.0%) 4927calBP - 4915calBP (5.9%) 4900calBP - 4892calBP (4.4%)	5211calBP - 5203calBP (1.3%) 5048calBP - 4873calBP (94.1%)

[参考値]

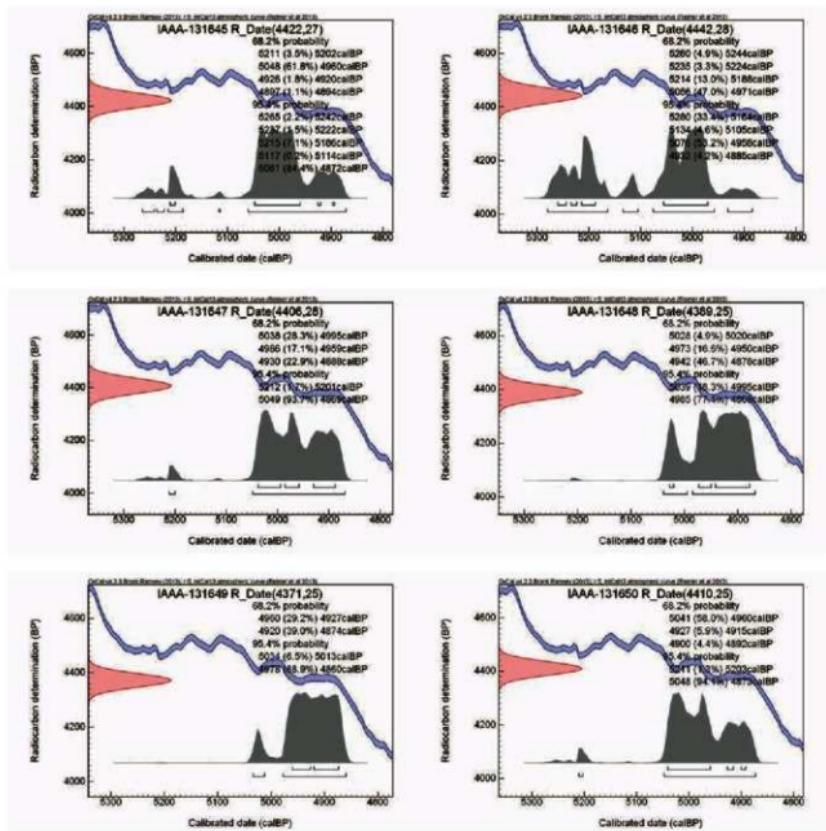
抽出して行われるのが一般的である。コラーゲンは熱に弱く、被熱によって失われるため、焼骨からコラーゲンを抽出することは困難である。

他方、骨を構成する物質の中で炭酸カルシウム( $\text{CaCO}_3$ )には炭素が含まれるため、この炭素を用いて年代測定することも原理的には可能である。しかし、土中に埋没している間に外部から入り込む炭酸の影響を受けると考えられ、得られる年代値を骨が形成された年代と見なすことができず、年代測定の試料として適切でないとされる。焼骨についても同様に理解されているが、近年焼骨の処理方法等を検討し、年代測定を積極的に行う研究も見られる。

Lanting らによると、火葬骨は  $600^{\circ}\text{C}$  以上の温度にさらされ、骨を構成するほとんどの無機物が再結晶化することで、外部からの影響を受けにくくなるという (Lanting et al. 2001)。上述の化学処理方法とおおむね同じ処理を行った焼骨の年代値は、同年代

と見られる木炭の年代値や、ほかの手がかりから推定される年代などとよく一致し、焼骨は有効な試料と結論付けている。Naysmith らも同じ処理方法で焼骨を検討し、推定される年代と一致するとした。さらに、同一試料を複数の測定機関で処理、測定して再現性の検証を試み、良好な結果が得られたとしている (Naysmith et al. 2007)。なお、焼骨の炭酸塩に含まれる炭素の由来については、燃焼中に大気や燃料との間で炭素の交換が生じることによる可能性も指摘されている (Hule et al. 2010)。

各地遺跡では、同じ遺構埋土から出土した焼骨と炭化材を測定し、両者の年代値がおおむね一致する結果が得られた。出土土器の時期とも整合している。このため、今回の測定は、この方法による焼骨の年代測定の有効性を検証する上で貴重な 1 事例になると考えられる。



第30図 曆年較正年代グラフ（参考）

## 文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
- Huls et al. 2010 Experimental study on the origin of cremated bone apatite carbon. Radiocarbon 52(2-3), 587-599
- Lanting, J.N. et al. 2001 Dating of cremated bones. Radiocarbon 43(2A), 249-254
- Naysmith, P. et al. 2007 A cremated bone intercomparison study. Radiocarbon 49(2), 403-408
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- Sluiter M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

早瀬亮介 2010 東北地方縄文時代の<sup>14</sup>C年代—南半部の事例集成を中心とした、平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)公開シンポジウム予稿集河川流域の縄文景観、79-90

小林達雄編 2008 縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション

# 報告書抄録

ふりがな	ざおうちょうないくせきはくつちょうさはうこくしょ 2						
書名	藏王町内遺跡発掘調査報告書2						
副書名	各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査（平成25年度） 附編1 谷地遺跡発掘調査概報（平成23・24年度調査） 附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）						
巻・次							
シリーズ名	藏王町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第20集						
編著者名	鈴木雅・早瀬亮介						
編集機関	藏王町教育委員会						
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡藏王町大字円田字西浦北10 TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831						
発行年月日	西暦2015年（平成27年）3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		
あたごやまいせき 愛宕山遺跡	藏王町大字平沢字立目場81	43010	05012	38° 06' 11"	140° 41' 46"	2013.12.10 2013.12.11	40.0m <sup>2</sup>
ほりのうちいせき 堀の内遺跡	藏王町大字円田字堀の内53-2	43010	05084	38° 06' 22"	140° 40' 38"	2013.04.18	113.0m <sup>2</sup>
ゆざかやまいせき 湯坂山B遺跡	藏王町大字円田字大和原9-1	43010	05023	38° 06' 44"	140° 38' 54"	2013.12.04	104.0m <sup>2</sup>
やちいせき 谷地遺跡	藏王町大字円田字谷地76-2	43010	05021	38° 06' 01"	140° 39' 05"	2011.07.14 2012.08.24	1590m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
愛宕山遺跡	集落跡	古墳	堅穴住居跡1軒	土師器、弥生土器、剣片	古墳時代前期の高所立地集落		
堀の内遺跡	集落跡	古墳～古代	堅穴住居跡4軒、溝跡2条、土坑8基、柱穴16か所	土師器、須恵器			
湯坂山B遺跡	集落跡	縄文	土坑・柱穴22か所	縄文土器、剣片、礫石器			
谷地遺跡	集落跡	縄文	住居跡14軒、貯蔵室55基、土器埋設遺構12基、配石遺構1基、遺物包含層、土坑・柱穴など	縄文土器、剣片石器、礫石器、土製品（土偶、ミニチュア土器、三角形・円盤形・管状・環状土製品、耳栓）、石製品（碇玉重飾品、異形石器、石棒、螺旋形）	縄文時代中期前半（大木7b・8a式圓）の拠点的集落 SI20 住居跡出土焼骨・炭化物の放射性炭素年代測定値（AMS法・ <sup>14</sup> C年代：4,440 ± 30yrBP ~ 4,370 ± 30yrBP）		
要約	<p>1. 平成25年度に実施した遺構確認調査・小規模緊急発掘調査について報告した。主な成果は下記のとおり。      &lt;小規模緊急発掘調査&gt;      愛宕山遺跡 古墳時代前期の住居跡1軒を確認した。高所立地の集落として特異な性格が窺われる。</p> <p>&lt;遺構確認調査&gt;</p> <p>堀の内遺跡 古墳時代～古代のものとみられる堅穴住居跡4軒などを確認した。</p> <p>湯坂山B遺跡 縄文時代中期後半のものとみられる土坑・柱穴などを確認した。</p> <p>2. 平成23・24年度に実施した谷地遺跡の発掘調査成果について概要を報告した。主な成果は下記のとおり。      縄文時代中期前半の住居跡14軒、貯蔵室55基、土器埋設遺構12基、配石遺構1基、遺物包含層（捨て場遺構）などを確認した。遺物は縄文土器、剣片石器、礫石器、土偶、土製品、石製品などが多量に出土している。縄文土器は大木7b・8a式が主体で、関東・北陸地方との関連を窺わせる異系統土器の共伴も見られる。ミニチュア土器、土偶、三角形土製品など祭祀に関連するとみられる遺物も豊富である。今回の調査地点は、縄文時代中期前半の比較的大規模な集落跡の中心部をなす一角と考えられる。</p>						



印刷製本仕様

製　本：A4判(縦)、無線(あじろ)綴じ、並製本  
ページ数：68ページ  
印　刷：表　紙　オフセット印刷、片面4色刷り、210線  
　　　本文等　オフセット印刷、両面4色刷り、210線  
用　紙：表　紙　コート225kg (PP貼加工)  
見返し　上質135kg  
本文等　マットコート90kg  
原稿形式：Adobe® InDesign® CS4 (6.06) PDF/X-1a2001  
(OS: Microsoft® Windows® 7 Professional)

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第20集

## 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2

各種開発事業に伴う遺構確認調査、  
小規模開発事業に伴う緊急発掘調査（平成25年度）  
附編1 谷地遺跡発掘調査概報（平成23・24年度調査）  
附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

谷地遺跡・愛宕山遺跡・堀の内遺跡・湯坂山B遺跡

2015年（平成27年）3月25日　印刷・発行

編集・発行　蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10  
TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831

印刷・製本 株式会社 グラフィック







谷地遺跡出土 硬玉製垂飾品（繩文時代）